ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 12 号

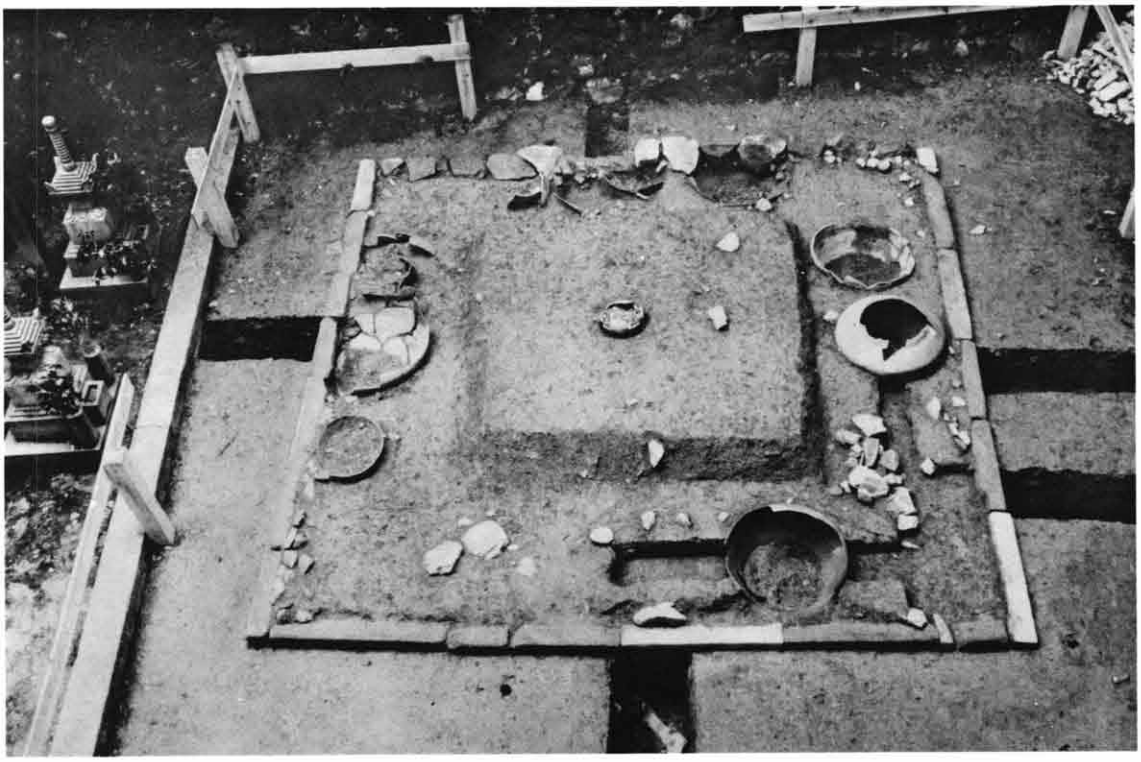
昭和59年度発掘調査予定の遺跡……杉原　和雄…… 1
昭和58年度京都府下埋蔵文化財の調査……引原　茂治…… 5
千代川・桑寺遺跡の発掘調査……森下　衛……13
園部窯跡群採集の古瓦……森下　衛……21
—昭和58年度発掘調査略報—……28
20. ケシケ谷遺跡　23. 三宝院宝篋印塔基壇
21. 奥谷西遺跡　24. 隼上り遺跡
22. 薬王寺古墳
府下遺跡紹介　20. 土師新町城跡（仮称）　21. 福知山城跡……37
長岡京跡調査だより……42
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧……45
センターの動向……46
受贈図書一覧……47

1984年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

重要文化財 三宝院宝篋印塔基壇

(1) 基壇全景（北から）



(2) 甕類検出状況（北から）

昭和59年度発掘調査予定の遺跡

杉　原　和　雄

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは，今年度で4年目を迎えたが，事業量は年々増加し，59年度も多忙な日々になりそうである。本年は，京都府教育委員会の御尽力により新庁舎の建設が果され，京都府向日市寺戸町南垣内の地において，4月21日から，環境・気分を一新して業務にとりくんでいる。5月2日に京都府教育委員会では多数の関係者を迎え完工式を行っている。所在地は，長岡宮域内の北西部にあたる高台で，庁舎の窓からは，北山をはじめ，東北に比叡山，東方に東山及び桃山丘陵，南方に木津川右岸の山々が一望できる。同一建物内には京都府教育委員会によって「京都府埋蔵文化財事務所」も設置され，当調査研究センターの業務と相まって，府下の埋蔵文化財保護にむけての新たな一歩をふみだした。

当調査研究センターでは，事業量の増加に伴い，本年度は総務課に1名，調査課に1名の増員を行い，事務局長以下，総務課6名，調査課30名，計37名の体制で対処することとなった。調査課は，業務の全体調整，普及啓発，資料の保管・管理・刊行等の業務を担当する企画資料部門と府下の発掘調査を業務とする第1～第4担当の計5つの部門で構成し，業務の円滑化と能率化を図っている。昭和58年度の調査受託は26件で，遺跡数にすると48件となる。なかでも国道9号バイパス建設に伴う亀岡市北金岐遺跡では，8,000 m^2 に及ぶ全面調査を実施し，府下では従来見られない広域を対象とした発掘として，多大の成果を収めた。

昭和59年度は，既に受託し現地の発掘調査を実施しているもの及び近く受託が予定されるものは，別表のとおり25件である。58年度から継続するものは，2. 田辺城跡，4. 波江古墳ほか等15件，新規のものは，1. 宮津城跡，6. 青野遺跡等10件である。継続のうちで長期，大規模な調査としては，5. 多保市城跡のほか，8. 小金岐古墳群ほか，9. 篠窯跡群，20. 隼上り遺跡ほか等で，いずれも国・公団からの委託による道路建設に伴う事業である。新規では，3. 志高遺跡，19. 西平川館跡，23. 木津地区内遺跡等である。

1. 宮津城跡は，宮津市教育委員会でも精力的な調査を実施しており，今回は第4次調査になる。旧大手門の隣接地に当り，石垣等の遺構検出が期待される。

3. 志高遺跡は，1級河川由良川の改修工事に伴う事業であり，昭和55～58年度に至る舞鶴市教育委員会の発掘調査によって，縄文時代から中・近世にわたる大規模遺跡であることが確認され，特に弥生時代前・中期，古墳時代初頭の建物跡や方形周溝墓群の遺構，

番号	名　称	種別員数	所　在　地	原因工事	調査対象面積	調査予定時期	備　考
					m²	月	
1	宮津城跡	城跡	宮津市鶴賀	道路改良	400	8～9	新規
2	田辺城跡	〃	舞鶴市南田辺	校舎改築	370	7～8	継続
3	志高遺跡	集落跡	〃　志高	河川改修	1,800	6～11	新規
4	波江古墳他	古墳他	福知山市上天津 他	宮福鉄道建設	2,300	5～11	継続
5	多保市城跡他	城跡他	〃　多保市 他	道路新設	6,800	4～2	〃
6	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町	道路改良	800	9～10	新規
7	味方遺跡	散布地	〃　味方町	道路新設	4,500	9～12	〃
8	小金岐古墳群他	古墳他	亀岡市大井町 他	〃	2,200	4～2	継続
9	篠窯跡群	窯跡	〃　篠	〃	20,000	4～2	〃
10	千代川遺跡	集落跡	〃　千代川町	道路改良	650	5～7	〃
11	千代川遺跡	〃	〃　〃	校舎増築	700	7～9	〃
12	上中遺跡	〃	北桑田郡京北町赤石	校舎改築	500	7～9	〃
13	長岡京跡	都城跡	向日市上植野町	庁舎新築	900	9～11	新規
14	長岡京跡	〃	長岡京市馬場，神足	道路改良	200	6～7	継続
15	長岡京跡・今里遺跡	〃	〃　今里	道路新設	730	7～9	〃
16	長岡京跡	〃	〃　開田	道路改良	160	5～6	〃
17	長岡京跡	〃	〃　栗生	〃	500	6～7	立会調査 新規
18	平安京跡	〃	京都市北区大将軍	校舎改築	400	7～9	新規
19	西平川館跡 他	城館跡他	相楽郡精華町	道路新設			〃
20	隼上り遺跡 他	散布地	宇治市東隼上り	〃	5,500	5～12	継続
21	燈籠寺跡	〃	相楽郡木津町内田山	校舎改築	500	7～8	新規
22	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市八幡	下水処理施設	500	4～8	継続
23	木津地区内遺跡	散布地他	相楽郡木津町	宅地造成	2,100	6～2	新規
24	千代川遺跡	集落跡	亀岡市千代川町	〃			遺物整理 継続
25	古殿遺跡	〃	中郡峰山町安	校舎改築			保存処理 〃

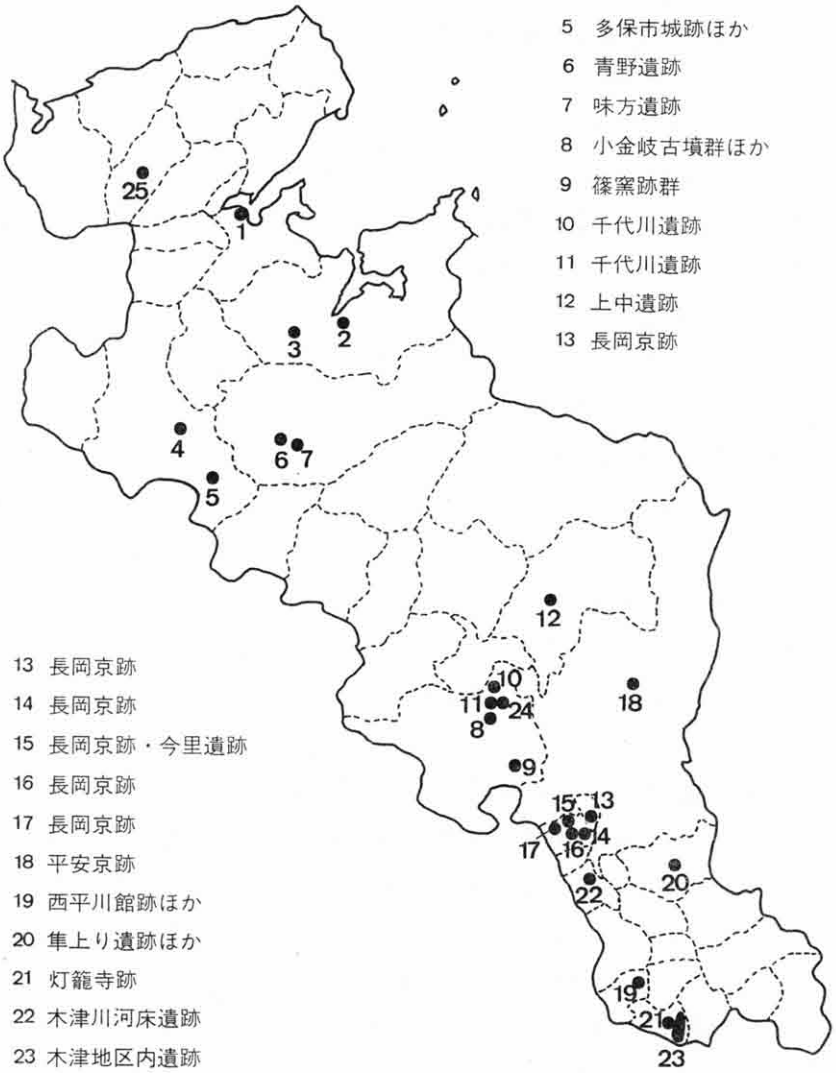
昭和59年度　発掘調査予定遺跡一覧表

大量の土器，石斧，石鏃，石剣等の遺物が注目されている。

4. 波江古墳は丘陵上に連接する古墳と推定されるが，時期不詳である。

7. 味方（みかた）遺跡は，旧石器や縄文時代の散布地として知られているが発掘調査の実施は今回が初めてである。沖積地または由良川の形成した自然堤防上の長期にわたる集落跡が遺存する可能性もある。

1 宮津城跡
2 田辺城跡
3 志高遺跡
4 波江古墳ほか
5 多保市城跡ほか
6 青野遺跡
7 味方遺跡
8 小金岐古墳群ほか
9 篠窯跡群
10 千代川遺跡
11 千代川遺跡
12 上中遺跡
13 長岡京跡



13 長岡京跡
14 長岡京跡
15 長岡京跡・今里遺跡
16 長岡京跡
17 長岡京跡
18 平安京跡
19 西平川館跡ほか
20 隼上り遺跡ほか
21 灯籠寺跡
22 木津川河床遺跡
23 木津地区内遺跡
24 千代川遺跡
25 古殿遺跡

昭和59年度　発掘調査予定遺跡位置図

8. 小金岐古墳群は，100基からなる群集墳内の横穴式石室墳である。推定丹波国府跡では試掘調査を実施する。前年度調査の北金岐遺跡については遺物整理を行う。

9. 篠窯跡群については，20,000 m² を対象として試掘を行い窯体や工房跡の検出に努める。

10. 千代川遺跡は，前年度に奈良前期の軒瓦や墨書土器が出土したり，弥生中期の方形周溝墓が検出されるなど多くの成果をえている。今年度はさらに延長して調査を行う。

12. 上中（かみなか）遺跡も前年度に弥生～古墳時代の遺物が出土し，今年度は遺構の検出に努める。

13.～17. は長岡京跡で，条坊遺構や古墳時代の集落跡が残っている可能性がある。

18. 平安京跡は，府指定史跡「平安京右京一条三坊九町遺跡」の隣接地の調査である。

20. 隼上り遺跡は，隼上り窯跡に関連する遺構が前年度に検出されている。広大な対象地内には古墳も含まれている。

22. 木津川河床遺跡は，3か年目に入るが，これまでの調査で弥生～中世に至る集落跡が各所に残っていることが立証されてきた。

23. 木津地区内遺跡は，古墳の調査のほか，散布地3か所の試掘調査を実施する。今年度が初年次となるが，今後長期にわたる調査となり，山城南部の遺跡の実態解明に多くの資料を提供することになろう。

24. 千代川遺跡は，57・58年度調査で古墳時代前期の集落跡を検出しているが，その整理作業のほか報告書を作成する。

25. 古殿遺跡は，前年度に続いて，多数の木器の保存処理を行うものである。

以上，昭和59年度の発掘調査予定遺跡について簡単に記したが，4年目をむかえ，当面する問題として，現地調査終了後の整理作業・報告書作成の体制をどのように整えるかといったことがあげられる。また発掘調査に伴う現地説明会の実施は可能な限り行っているが，その資料についてもできるだけ平易な内容のものを作成するよう努力していきたい。これらの発掘調査のほか，府下関係機関の埋蔵文化財担当職員を中心とした研修会の開催，府民を対象とした講演会の開催などを京都府教育委員会との共催で実施している。また，調査結果の速報を兼ねた『京都府埋蔵文化財情報』の定期的刊行や発掘調査報告書の刊行も精力的に取りくんでいきたいと念じている。

（杉原和雄＝当センター調査課 課長補佐）

昭和58年度京都府下埋蔵文化財の調査

引　原　茂　治

京都府下における昭和58年度の埋蔵文化財発掘調査は，京都府教育委員会に提出された発掘調査届出書及び通知書の件数からみると，202件となっている。昨年度の194件に対して，わずかながら増加している。

当調査研究センターが行う調査は，「京都市域を除く国・公社・公団及び京都市域を含む府事業等に伴う遺跡の発掘調査」であるが，昭和58年度には，各関係機関から31件の調査委託があった。1件につき複数の遺跡を対象としているものもあるので，実際に発掘調査を実施した遺跡は別表のとおり36か所に及んでいる。

京都府下では，当調査研究センターの他に，京都府教育委員会・各市町村教育委員会・財団法人 京都市埋蔵文化財研究所・財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター・平安博物館・各大学構内遺跡調査会等が，それぞれ発掘調査を実施している。

本稿では，当調査研究センターが実施した調査の概要について述べる。その他，京都府教育委員会等の調査については，各機関発行の報告書や資料を参照していただきたい。

1.　丹後・中丹地域

舞鶴市**中山城跡**は，由良川東岸の独立丘陵上に位置する。当城跡の南東約2km に存在する建部山城跡は，丹後守護一色氏の居城であり，当城はその支城とみられている中世山城跡である。調査の結果，城跡に関する遺構・遺物は確認できなかったが，近世墓8基を検出した。近世墓からは錫杖や銅鋺などの特殊な遺物が出土した。また，出土した棺金具からは，櫃状のものを棺に転用していることがうかがわれる。近世の葬法の一端をうかがわせる興味深い資料である。

舞鶴市**田辺城跡**では，三の丸堀跡と推定される地点を2か所調査した。これらの調査では三の丸堀跡に関する遺構は検出されなかった。

福知山市では，近畿自動車道舞鶴線関係の遺跡5か所を調査した。これらの遺跡は，いずれも台地上に位置する。**洞楽寺遺跡**（とうらくじ）では6世紀初頭頃の竪穴式住居跡2基・土坑・溝などを検出した。**洞楽寺北遺跡**からは明確な遺構・遺物は検出されなかった。**ケシケ谷遺跡**からは，弥生時代中期の円形竪穴式住居跡12基以上，古墳時代後期の方形竪穴式住居跡1基などを検出した。出土遺物は，弥生土器・須恵器などの土器類の他に，縄文時代から弥生時代にかけての石器が多数出土した。石器類のうちで黒曜石の石鏃1点が含まれている

昭和58年度 発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	中山城跡	城跡	舞鶴市中山	竹原 一彦 小池 寛	58. 6～9	近世墓8基・掘切
2	田辺城跡	城跡	舞鶴市行永	辻本 和美	58. 7	顕著な遺構なし
3	田辺城跡	城跡	舞鶴市円満寺	辻本 和美	58. 8～9	中世土坑
4	ケシケ谷遺跡	集落跡	福知山市大内	岩松 保	58. 8～59. 3	弥生時代中期・古墳時代の竪穴式住居・溝・土坑
5	洞楽寺遺跡 洞楽寺北遺跡	集落跡	福知山市大内	岩松 保 藤原 敏晃	58. 5～6	古墳時代の竪穴式住居2・土坑7・溝1
6	奥谷西遺跡	集落跡	福知山市大内	藤原 敏晃	58. 12～59. 3	弥生～古墳時代の竪穴式住居4，平安～鎌倉の溝1，平安の土坑1，弥生～古墳の溝1
7	薬王寺古墳	古墳	福知山市多保市	小山 雅人 伊野 近富	59. 3	木棺直葬
8	土師南遺跡	散布地	福知山市土師南町	藤原 敏晃 岩松 保	58. 7	顕著な遺構なし
9	石本遺跡	散布地	福知山市牧	辻本 和美	59. 3	試掘調査
10	青野西遺跡	集落跡	綾部市青野町	小山 雅人	58. 4～9	弥生～古墳の竪穴式住居15・土坑・大溝・旧河道2
11	蒲生遺跡	集落跡	船井郡丹波町豊田	引原 茂治	58. 7～8	弥生中の竪穴式住居1・土坑6・掘立柱建物1・柵列1
12	上中遺跡	散布地	北桑田郡京北町上弓削	増田 孝彦	58. 7～9	土坑1・ピット3
13	千代川遺跡Ⅲ	集落跡	亀岡市千代川町	岡崎 研一	58. 5～8	古墳時代の竪穴式住居2・溝3
14	千代川遺跡Ⅳ	集落跡	亀岡市大井町小金岐北浦	村尾 政人	58. 6～10	弥生～奈良の掘立柱建物1・溝7，平安～鎌倉の溝2
15	千代川遺跡Ⅴ	集落跡	〃　〃	村尾 政人	58. 10～11	古墳時代の竪穴式住居4・ピット・土坑
16	千代川・桑寺遺跡	集落跡 官衙跡 寺院跡	亀岡市千代川町北ノ庄	森下 衛 引原 茂治	58. 9～59. 1 59. 2～3	弥生の方形周溝墓，奈良時代の掘立柱建物・溝
17	北金岐遺跡	集落跡	亀岡市大井町	石井 清司 田代 弘 森下 衛	58. 5～59. 3	弥生～古墳時代の竪穴式住居・溝・井戸
18	亀岡条里制跡	条里跡	亀岡市大井町他	石井 清司 田代 弘 森下 衛	58. 7～59. 3	顕著な遺構なし
19	篠窯跡群	窯跡	亀岡市篠町	水谷 寿克 引原 茂治 岡崎 研一	58. 5 59. 2～3	試掘調査 灰原・工房跡？
20	長岡宮跡134	宮殿跡	向日市上植野町南開	長谷川 達	58. 6	土坑・溝の他顕著な遺構なし
21	長岡宮跡140	宮殿跡	向日市上植野町	増田 孝彦	58. 10～11	溝6・土坑2・ピット
22	長岡京跡右127	都城跡	長岡京市下海印寺他	山下 正	58. 4～8	石だまり・溝の他顕著な遺構なし
23	長岡京跡右141	都城跡	長岡京市今里	山下 正	58. 8～10	溝3 石敷1
24	長岡京跡右148	都城跡	長岡京市開田	長谷川 達 黒坪 一樹	58. 11～12	掘立柱建物1・溝1 畦状遺構

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
25	長岡京跡右153	都城跡	長岡京市今里	長谷川 達	58. 12～59. 2	竪穴式住居2・掘立柱建物2・小土坑多数・溝状遺構4～5条
26	長岡京跡左103	都城跡	長岡京市神足	長谷川 達	58. 8	溝1
27	百々遺跡	散布地	乙訓郡大山崎町夏目	竹井 治雄	58. 2～3	顕著な遺構なし
28	旧洛南中学校構内遺跡	都城跡	京都市南区	松井 忠春	58. 7～59. 1	土坑状掘り込み方形住居跡
29	三宝院宝篋印塔基壇	古墓	京都市伏見区醍醐上端山町	増田 孝彦 山口 博 引原 茂治	58. 11～59. 3	蔵骨器埋納
30	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市八幡字源野・焼木	黒坪 一樹	58. 5～9	竪穴式住居11 掘立柱建物・貯蔵穴
31	隼上り遺跡	散布地	宇治市菟道隼上り	小池 寛 竹原 一彦 戸原 和人	58. 10～59. 3	中世古墓2・土坑1 近世の井戸・石列・柱穴・土坑
32～36	西出合遺跡他	散布地	相楽郡精華町東畑・馬原	石尾 政信 山下 正	58. 4～59. 3	顕著な遺構なし

のが注目される。また，分銅形土製品の破片1片が出土したのも注目される。**奥谷西遺跡**は，浅い谷をへだててケシケ谷遺跡の南西側に隣接する。集落を囲む環濠とみられる弥生時代中期の大規模な溝状遺構・円形竪穴式住居跡，古墳時代後期の方形竪穴式住居跡2基などを検出した。この遺跡の調査は昭和59年度も継続して行う予定であり，詳細は今後に期したい。**薬王寺古墳**は土坑を埋葬主体とした古墳である。土坑内から6世紀前半頃の須恵器が出土した。近畿自動車道関係の遺跡調査では，現在の集落から約 20～30 m 程度高い台地上に営まれた集落跡が検出されている。本年度調査した洞楽寺遺跡・ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡や，以前に調査した宮遺跡などである。年代的には弥生時代中期と古墳時代後期のものがほとんどであり，弥生時代後期の集落跡は検出されていない。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては昭和57年度調査の城ノ尾城館跡で竪穴式住居跡1基が検出されているのみである。このような年代ごとの集落の変遷をどのようにとらえるか，またこれらの集落の持つ性格などについても，今後検討されなければならない問題を含んでいる。また，これら一連の調査では，古墳時代後期の調査も行っているが，集落跡と古墳の関連についても，今後の検討課題となろう。

そのほかに，福知山市内では，土師南遺跡と石本遺跡の調査を行った。**土師南遺跡**からは顕著な遺構・遺物は検出されなかったが，深い盛土の下層に中世遺物の包含層が残存しているのを確認した。これは，調査地付近に何らかの遺構が存在する可能性を示すものである。**石本遺跡**は，本年度は試掘調査である。試掘坑からは，土器片多数が出土し，また焼土なども検出しており，遺構が残存している可能性が高い。詳細は昭和59年度の本調査を待ちたい。

昭和58年度 発掘調査実施遺跡位置図

綾部市では，**青野西遺跡**（あおのにし）の調査を行った。この遺跡は，由良川左岸に位置し，東側には，京都府下でも有数の集落遺跡である青野遺跡が広がっている。また南東側には，青野南遺跡・綾中遺跡などの集落跡がある。この調査では，竪穴式住居跡15基・掘立柱建物跡１棟・溝などを検出した。竪穴式住居跡は古墳時代前期から中期にかかる頃までのものである。上記の青野遺跡などでは，７世紀代の住居跡が圧倒的に多いのであるが，今回の調査地からは，７世紀代の住居跡は検出されていない。その点，他の遺跡とは様相を異にする。こ

のように，限られた時期の集落を広範囲に調査したことは，由良川流域の集落跡を研究するうえで，貴重な資料を提供するものといえよう。

2. 南丹地域

丹波町**蒲生遺跡**は，広範囲な遺物散布地であるが，本年度は，その北西端にあたる部分を調査した。この調査では弥生時代中期の円形竪穴式住居跡1基・土坑6基，中世頃の掘立柱建物跡1棟・柵列跡を検出した。由良川上流域における弥生時代の集落跡であり，先年京都大学によって調査された美月遺跡とともに，周辺地域の弥生時代を考える上で貴重な遺跡である。

京北町**上中遺跡**の調査では，顕著な遺構は検出されなかったが，自然流路跡から弥生時代後期の土器が出土した。近江系とみられる甕などもあり，文化交流の経路を考える上で資料を提供するものといえよう。

亀岡市**千代川遺跡**は，亀岡盆地北西側の千代川町一帯に広がる広範囲な遺跡である。本年度は第3次から第5次までの調査を行った。第3次調査は昨年度からの継続である。昨年度の調査では竪穴式住居跡2基・大規模な自然流路跡を検出した。本年度は，集落の広がりを確認すべく，拡張調査を行った。その結果，住居跡は検出されなかったが，自然流路の中から堰の遺構が検出された。また，布留式並行期の土師器甕などが出土した。第4次調査は，第3次調査地の西側で行った。奈良時代の掘立柱建物跡1棟や，奈良時代から中世に至る多数の溝状遺構が検出された。第5次調査は，昭和56年度に調査した第2次調査地の北側に隣接する地点で行った。古墳時代前期の竪穴式住居跡，奈良時代から中世にかけての溝・ピットなどを検出した。

亀岡市**千代川・桑寺遺跡**は，広範囲な千代川遺跡の一部である。桑寺廃寺・推定丹波国府跡を，調査地内に含む。この遺跡の調査では，弥生時代中期の方形周溝墓の一部とみられるL字状の溝状遺構，集落を区画するものとみられる溝状遺構，竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などを検出した。これらの遺構からは，畿内第Ⅳ様式並行期の土器が多量に出土した。亀岡市周辺地域では，これまでこの時期の資料はほとんど無く，この地域の弥生文化を考える上で貴重な資料が得られた。桑寺廃寺に関しては，基壇の一部といわれる土壇の残存・小字名・瓦片の分布などで，存在が推定されていたが，具体的なことは，これまでわからなかった。今回の調査では，伽藍の中心部については遺構が残存していなかったが，寺域の東を限るとみられる築地状遺構，この廃寺に関係するとみられる掘立柱建物跡3棟分を検出した。「寺」と墨書された須恵器が出土した。また，出土した軒丸瓦から，この寺の創建は7世紀後半頃と推定される。丹波国府跡に関しては，具体的な遺構は確認できな

かったが，「田邊」「吏」と墨書された須恵器が出土したことにより，当地に存在する可能性が高くなった。この千代川・桑寺遺跡の調査は，道路拡幅工事に伴う限られた範囲のものであったが，その成果は多大なものであったといえる。

亀岡市**北金岐遺跡**の調査では，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡・溝状遺構・土坑，古墳時代後期の竪穴式住居跡・溝状遺構，奈良時代から平安時代初頭にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・井戸，鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・井戸などを検出した。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての溝状遺構には堰が設けられており，木製品が出土した。注目されるものとしては，田舟・高床式倉庫の梯子の一部などがある。奈良時代から平安時代初頭にかけての掘立柱建物跡は溝で区画された中に配置されており，この頃の集落の様相を示す重要な資料である。鎌倉時代から室町時代にかけての井戸から出土した瓦器椀は，亀岡地域の瓦器を考える資料となる。

亀岡市**篠窯跡群**では，田畑の試掘調査を行い，灰原・工房跡に関連するとみられる柱穴および土器だまりを検出した。灰原からは10世紀代の須恵器・緑釉陶器などが出土した。

昭和58年度 調 査 遺 跡 年 表

時代＼地域		丹後・中丹	南丹	京都・乙訓	南山城
旧石器					
縄文		(ケシケ谷遺跡)	(上中遺跡)		
弥生	前期				
	中期	ケシケ谷遺跡 奥谷西遺跡	蒲生遺跡 千代川桑寺遺跡		
	後期	奥谷西遺跡 青野西遺跡	千代川遺跡Ⅲ 千代川遺跡Ⅴ 北金岐遺跡 上中遺跡		
古墳	前期				(木津川河床遺跡)
	中期				
	後期	薬王寺古墳 洞楽寺遺跡 ケシケ谷遺跡 奥谷西遺跡			木津川河床遺跡 隼上り遺跡
白鳳			千代川桑寺遺跡		
奈良			千代川遺跡Ⅳ 北金岐遺跡		
平安			千代川桑寺遺跡 篠窯跡群	長岡宮跡 長岡京跡 旧洛南中学校構内遺跡	
中世		土師南遺跡 中山城跡	北金岐遺跡	三宝院宝篋印塔	
近世		田辺城跡		旧洛南中学校構内遺跡	

この灰原に伴う窯体は削平のため残存していなかったが，出土遺物からみて小形の平窯ではないかと推定される。柱穴・土器だまりの性格などについては，次年度の調査に期したい。

亀岡盆地は，その中央を貫流する大堰川によって東西に分けられる。近年，大堰川西側では，国道9号バイパス建設に伴う発掘調査などによって，遺跡の分布があきらかになりつつある。ことに，つい最近まではほとんどわかっていなかった弥生時代から古墳時代前期にかけての様相が，次々とあきらかになってきている。当調査研究センターが調査を行った千代川遺跡，千代川・桑寺遺跡，北金岐遺跡，南金岐遺跡，太田遺跡，これまでに知られていた馬場が崎遺跡・余部遺跡，遺物が採集された穴川遺跡などの分布状態をみると，大堰川西側の標高100 m前後の広い河岸段丘上一帯には，その時期の遺跡がほぼ全面にわたって分布するとみてよいと思われる。

3. 京都市・乙訓地域

京都市域では，平安京羅城外に比定されているが，九条大路・羅城門に隣接する地域でもある南区**旧洛南中学校構内遺跡**の調査を行った。この調査では顕著な遺構は検出されなかったが，部分的に残る遺物包含層の状況や方形住居跡ともみられる遺構が検出されたことから，付近に何らかの遺構の存在が推定される。

京都市伏見区醍醐の**重要文化財三宝院宝篋印塔**は，三重の基壇をもつ石塔である。この宝篋印塔の解体修理に伴い，基壇部の調査を行った。基壇内の塔直下から，短頸壺・信楽焼壺・大甕の抜き取り跡と3つの埋葬施設が上下に重って検出された。また，基壇四辺に各辺3つずつの大甕などを蔵骨器に用いた埋葬施設が検出された。基壇外からも埋葬施設が検出され，これも四周に3つずつ並んでいる様子であった。基壇内の蔵骨器のなかには，基壇外の埋葬施設から改葬されたことがわかるものもある。蔵骨器に用いられている壺・甕は常滑焼がほとんどであるが，備前焼や信楽焼なども含まれ，焼成年代は12世紀代から14世紀代に及ぶ。このような形での宝篋印塔下の埋葬施設は，全国的にも発見例がない。このような埋葬施設のもつ意味や性格については今後検討を要するものである。いずれにしても中世の埋葬施設の一例として注目すべきものである。

乙訓地域では，長岡宮跡で2か所，長岡京跡右京域で4か所，長岡京跡左京域で1か所，長岡京外ではあるが大山崎町百々遺跡の調査を行った。内容については，本誌『京都府埋蔵文化財情報』の「長岡京跡調査だより」を参照されたい。

4.　南山城地域

八幡市**木津川河床遺跡**は，木津川に沿った低地に位置する遺跡である。本年度の調査では，古墳時代後期の竪穴式住居跡11基・溝状遺構・土坑などを検出した。この調査の最も大きい成果は，河川敷ともいえる低地から集落跡を検出したことであろう。これまで，木津川周辺の低地は，何らかの遺跡の存在が考えられていたものの，その実態については不明であった。今回古墳時代後期の集落跡を検出したこと，検出面の下層からさらに古い時期の土器が部分的にまとまって出土していること，昨年度の調査で弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土していることを考え合せると，周辺の低地域に弥生時代から古墳時代の集落跡が存在している可能性が高くなったといえよう。この遺跡は，この地域の先史時代を考えるうえで，非常に重要な意味をもつ。

宇治市**隼上り**(はやあが)**遺跡**の調査では，掘立柱建物の柱穴を多数検出した。飛鳥時代から奈良時代にかけてのものとみられる。この遺跡の北に隣接する隼上り瓦窯で焼成された瓦が出土しており，焼成した製品の集積地ともみられる。また，調査地の南方に位置する白鳳時代の寺院大鳳寺に使用された斜格子叩きをもつ平瓦も出土しており，大鳳寺とも何らかの関係があったものとみられる。このように，周辺の遺跡との関連が想定される興味深い遺跡である。

精華町では**西出合遺跡**ほか４か所の調査を行ったが，顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

以上，当調査研究センターが昭和58年度に行った調査の概略を述べたが，詳細は，当調査研究センター刊行の『京都府遺跡調査概報』等を参照していただきたい。

（引原茂治＝当センター調査課調査員）

参考資料

『埋蔵文化財発掘調査概報（1984)』　京都府教育委員会　1984
『京都府埋蔵文化財情報』第８号　1983．6
『京都府埋蔵文化財情報』第９号　1983．9
『京都府埋蔵文化財情報』第10号　1983.12
『京都府埋蔵文化財情報』第11号　1984．3
「洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡・山田館跡・城ノ尾城館跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 83-01）1983．7.30
「青野西遺跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 83-02）1983．8.10
「木津川河床遺跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 83-03）1983．8.23
「中山城跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 83-04）1983．9.17
「北金岐遺跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 83-05）1983.12.18
＜以下，50ページに続く＞

千代川・桑寺遺跡の発掘調査

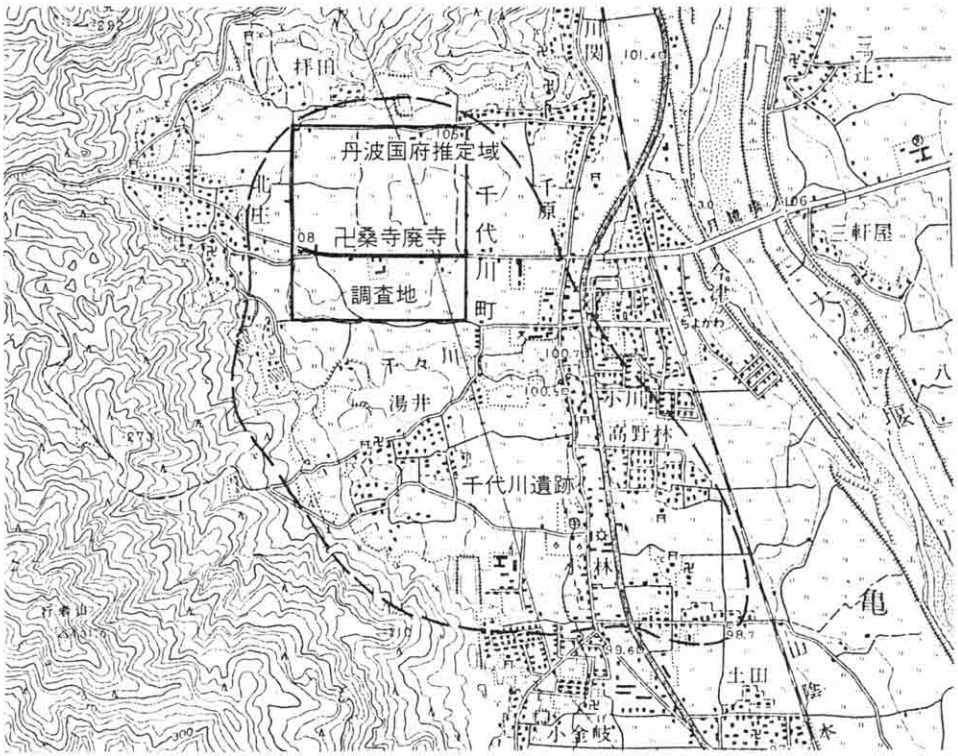
森下　衛

1. はじめに

千代川・桑寺遺跡は，亀岡市千代川町千原小字千原ケ前1番地及び北ノ庄小字桑寺5番地に所在し，大堰川の右岸，行者山の北東麓に形成された扇状地上に立地している。

当遺跡周辺は，過去からの調査で弥生時代から平安時代にわたる遺構・遺物の出土が報告されており，千代川遺跡として広く知られていた。また整然と残る条里制地割や地名から，千代川遺跡の北半部を丹波国府跡とする説が提唱されており，国府推定域内の一画には奈良時代の寺院跡（桑寺廃寺）の存在も想定されていた。(注)

今回の調査は，府道（北ノ庄・千代川停車場線）の道路拡幅工事に先立って行ったものであるが，この道路が千代川遺跡，さらには国府推定域・寺院跡の一画を横断しているため，当初から諸々の遺構・遺物の出土が予想されていた。



第1図　調査地位置図（1/25,000）

発掘調査は，昭和58年9月19日から昭和59年3月3日まで行った。

2. 調査経過

調査はまず，調査地内に7か所の試掘トレンチを入れ遺構の有無の確認及び土層の観察を行った。その結果，すべてのトレンチで弥生時代から鎌倉時代にわたる多量の遺物が出土するとともに，多数の柱穴や溝状遺構を検出した。そのため，それぞれのトレンチを拡張すると同時に，新たに8か所のトレンチを掘削し，遺構の検出に努めた。

また，調査地が西から東へゆるやかに下る地形を呈しており，そこに田畑が形成されているため，盛土や削平がくり返し行われていた。そのため層序は一定ではなかったが，基本的には耕土・床土・暗灰色砂質土・黒灰色砂質土・黒色土・黄灰色粘土もしくは砂質土となっている。そして遺構は黄灰色粘土もしくは，砂質土上面で確認した。

3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は，おおむね西半部にみられる奈良時代を中心とするものと，東半部にみられる弥生時代中期を中心とするものに分けることができる。

以下，その主なものについて述べる。

(1) 西半部（第2図）

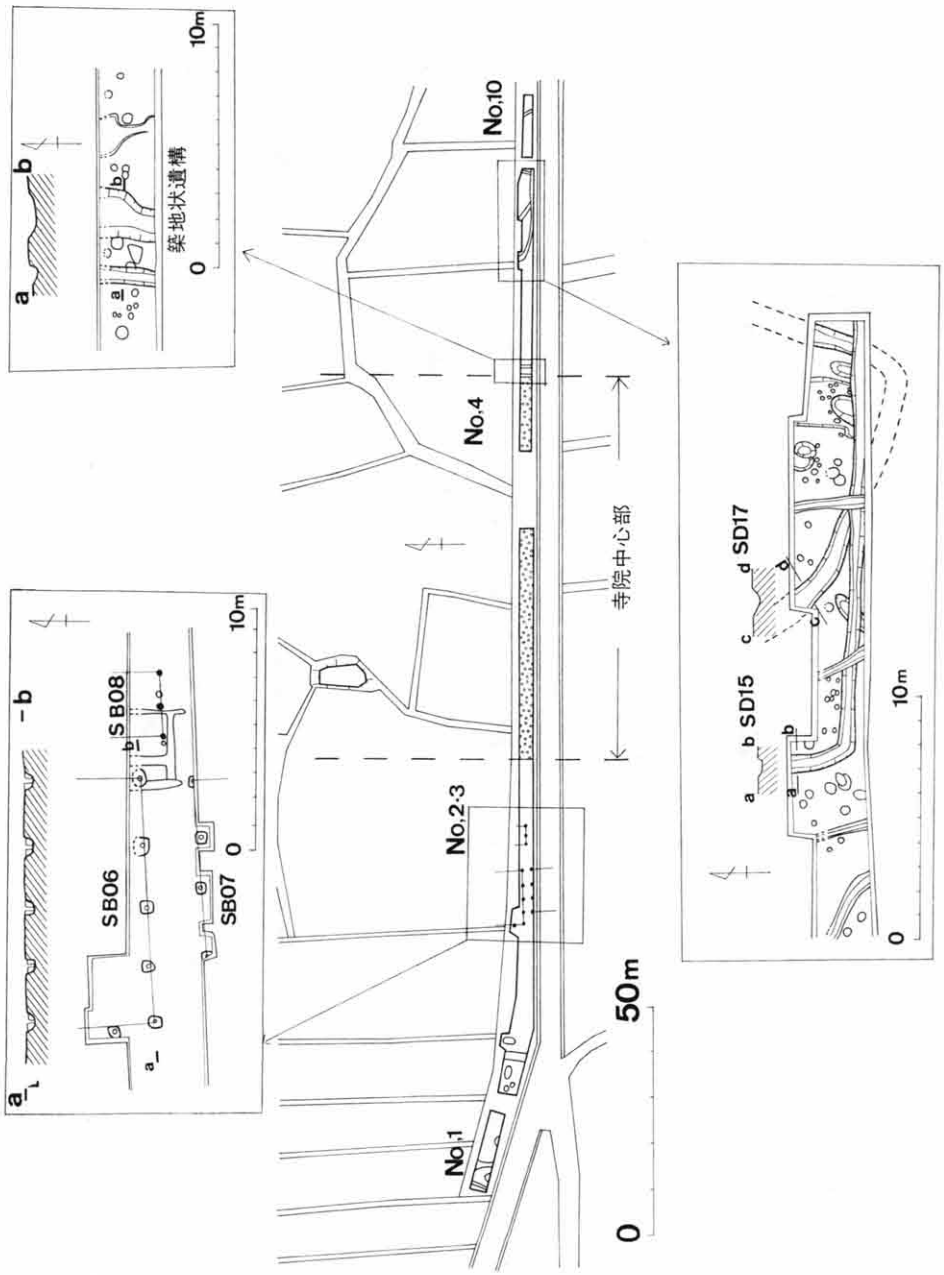
従来，桑寺廃寺の名残りと言われてきた土壇付近に幅約 80 m にわたって青灰色粘土の広がりがみられ，その東端で築地状遺構を検出した。またその西端は約 30 cm の段をなして下がり，下がった部分から掘立柱建物跡3棟 (SB 06・07・08) を検出した。これらは，いずれも部分的な検出にとどまり，その全体の規模は不明である。

ただ SB 06 は，一辺約 40～50 cm の掘形を有し，径約 15～20 cm の柱痕跡を残す柱穴が東西に約 2.4～3 m 間隔に4間，南北方向に約 1.8 m 間隔に1間以上並び，今回の調査で検出した建物跡の中で最も立派なものである。

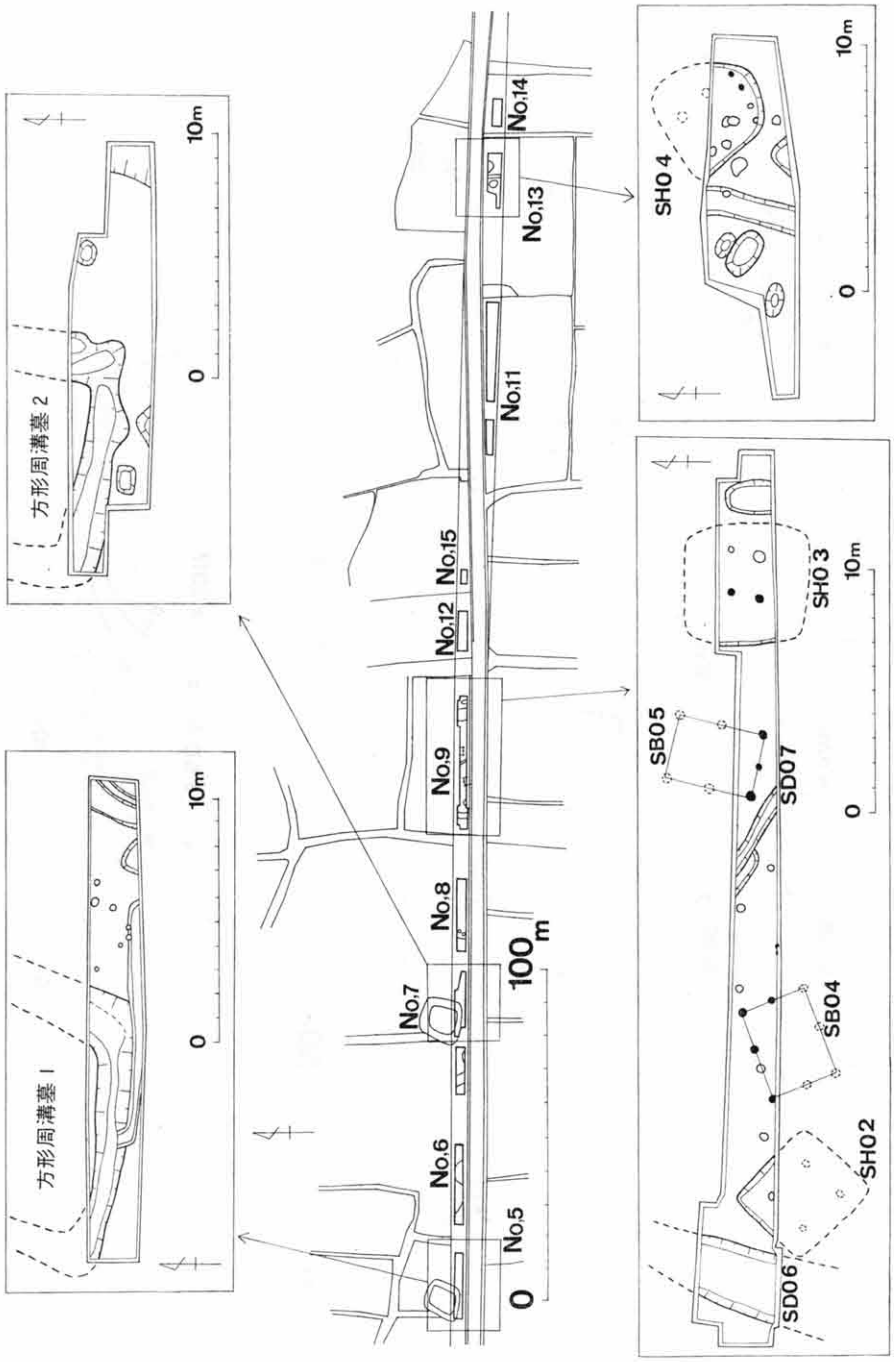
これらは，おそらく桑寺廃寺関係の遺構と考えられ，青灰色粘土の広がりは寺院中心部を示すものと思われる。

さらに，No. 4 トレンチ東側において，L字状に屈曲する奈良時代の溝 (SD 15) を検出した。これは，何らかの区画を意味するものと考えられるが，これが桑寺廃寺中心部の東限と考えている築地状遺構のさらに東側に位置していることは，桑寺廃寺との関連でとらえるより当地に比定されている国府との関係を重視すべきと考える。

また，この溝に切られた状態で弥生時代中期の方形周溝墓を検出した。これは，東半部にみられる弥生時代の遺構群の西限にあたるものだろう。



第2図　トレンチ及び遺構配置図（西半部）



第3図　トレンチ及び遺構配置図（東半部）

(2) 東半部（第3図）

東半部では，遺構はかなりの削平をうけており遺存状態は悪いが，弥生時代中期の遺構群を検出した。

No. 5・No. 7 トレンチでは，それぞれ1辺約 10 m 前後の規模を有す方形周溝墓を検出した。

また，No. 9・No. 13 トレンチでは，集落の一部を検出した。No. 9 トレンチ西端で検出した溝 (SD 06) が集落の西を限るものと考えられ，それより東側に竪穴式住居跡3基 (SH 02・03・10)，掘立柱建物跡3棟 (SB 04・05・09) などを検出した。そして，その東端は，No. 13 トレンチ東端で地形が一段下がるためこれがそれにあたると考えられる。

これら集落跡の内部で検出した柱穴や溝状遺構のいくつかの内部からは，弥生時代後期の遺物も若干出土しており，中期から後期にかけてこの地に集落が営まれていたと思われる。さらに，No. 6 トレンチでは，弥生時代から奈良時代にわたり流れていた旧河道を検出している。

4. 出土遺物

今回の調査では，整理箱約120箱に及ぶ多量の遺物が出土した。

それらは，弥生時代中期～鎌倉時代にわたるものであるが，その中心は，弥生時代中期のもの（第4図）と奈良時代～平安時代のもの（第5図）である。

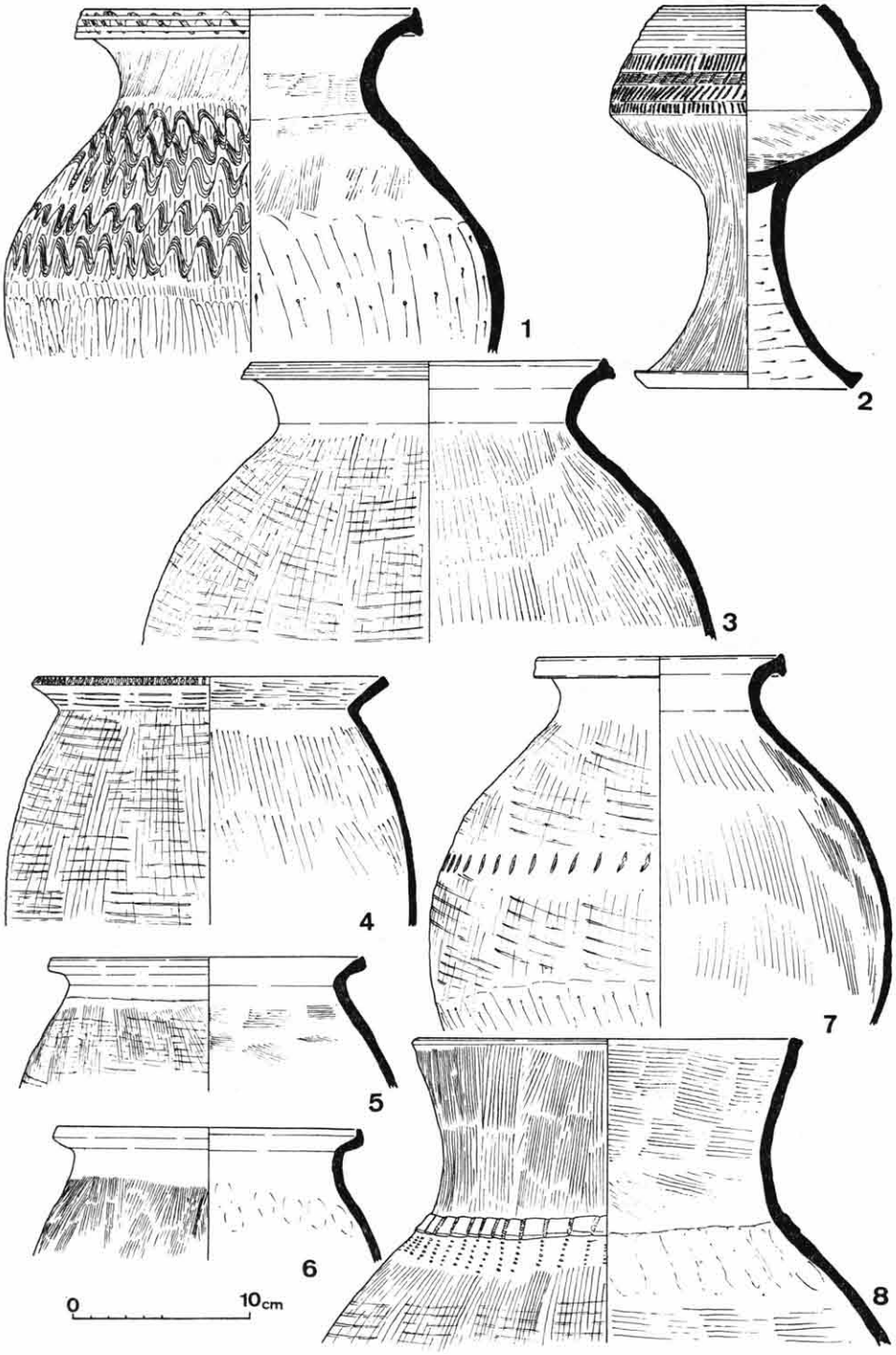
弥生時代中期の遺物は，方形周溝墓に供献されていたものや，集落を限る溝に投棄されたものが大半である。これらは，これまで当地方では，資料的には空白に近かった時期の，まとまった良好な資料であり，今後丹波地方の弥生文化を考える上で貴重な資料を得たと言える。

また奈良時代～平安時代にわたる遺物の大部分は須恵器・瓦類である。これらは7世紀末～11世紀初め頃までのものが出土しているが，調査地西半部から出土した桑寺廃寺に伴うものと，No. 6 の旧河道からまとまって出土したものに分けられる。

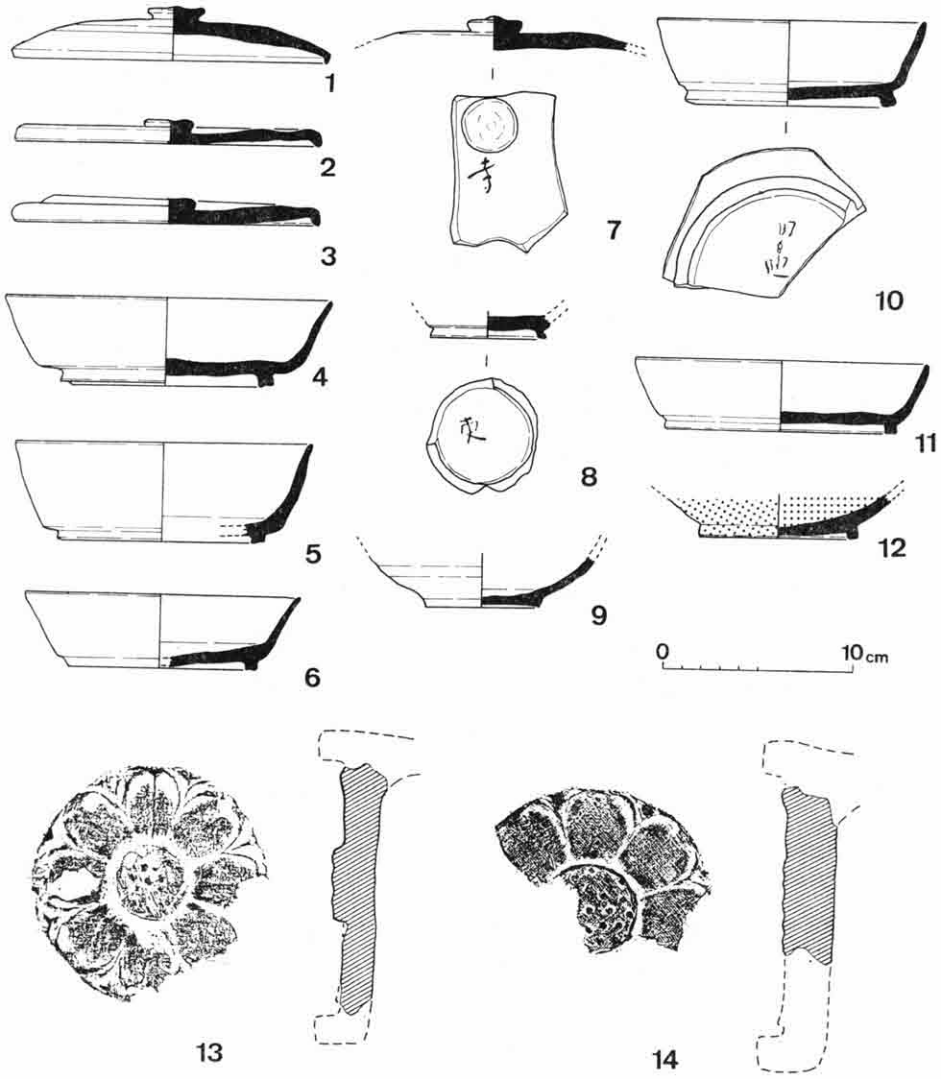
桑寺廃寺に伴うものとしては，特に「寺」・「吏」と判読できるものをはじめとする5点の墨書土器や3点の緑釉陶器が出土している。

さらに，これらに伴って出土した古瓦類は，7世紀後半期の特徴を有するものが大半を占める。中でも，軒丸瓦のうち最古型式のものは，いわゆる飛鳥末様式を踏襲するもので，丹波・丹後地方では最も古い様式を有している（第5図）。

No. 6 トレンチの旧河道からまとまって出土した遺物には，「田邊」と判読できる墨書土器をはじめ，緑釉陶器などが含まれていた。また，これらに伴って舟状木製品など多くの



第4図　出　土　遺　物　実　測　図（東半部）



第5図　出　土　遺　物　実　測　図（西半部）

木器も出土している。

これらNo. 6トレンチの旧河道から出土した遺物は，桑寺廃寺の中心部とはやや離れたところで，一時に投棄された状態で出土しているため，No. 4トレンチのL字状に屈曲する溝（SD 15）と同様，国府との関連で考えるべきものと思われる。

5. ま と め

今回の調査は，限られた面積の調査ではあったが，以上のように多大なる成果をおさめることができた。以下，それらを簡単にまとめておく。

(1)　近年，亀岡盆地でも国道９号バイパス関係の発掘調査で，弥生時代前期～中期初頭の太田遺跡や後期の北金岐遺跡という大規模な集落の存在が明らかとなってきた。しかし，今回の調査で検出した弥生時代中期の集落や墳墓は，時期的に上記の両遺跡の中間に位置し，資料的に空白に近かったところを埋めるものである。今後，当地方の弥生文化を考える上で，不可欠の資料を得たと言える。

(2)　丹波国府跡や桑寺廃寺については，従来この地に推定はされていたものの，考古学的な資料は皆無に等しいという状態であった。

しかし，今回の調査で検出した遺構，あるいは遺物から桑寺廃寺の存在が明らかとなったばかりではなく，その規模や創建の年代を考える上で重要な資料を得ることができた。また国府に直接関連する遺構（条坊の痕跡等）は検出しえなかったものの，No. 6 トレンチで検出した旧河道からまとまって出土した遺物は，国府の存在をより可能性のあるものとした。

最後に，今回の調査で検出した遺構は，当地周辺に広大に広がる遺構群のごく一部であろうと思われる。現に，今回の調査でも微量ではあったが，古墳時代後期の遺物が出土しており，調査地の北方に位置する拝田古墳群を築造した人々の集落跡もこの付近に存在するであろうと考えられることもその一つである。

今後，当地周辺の開発には埋蔵文化財に対する充分な配慮が必要であろう。

（森下　衛＝当センター調査課調査員）

注　木下　良「丹波国府址」（『古代文化』16-2）1966. 2

園部窯跡群採集の古瓦

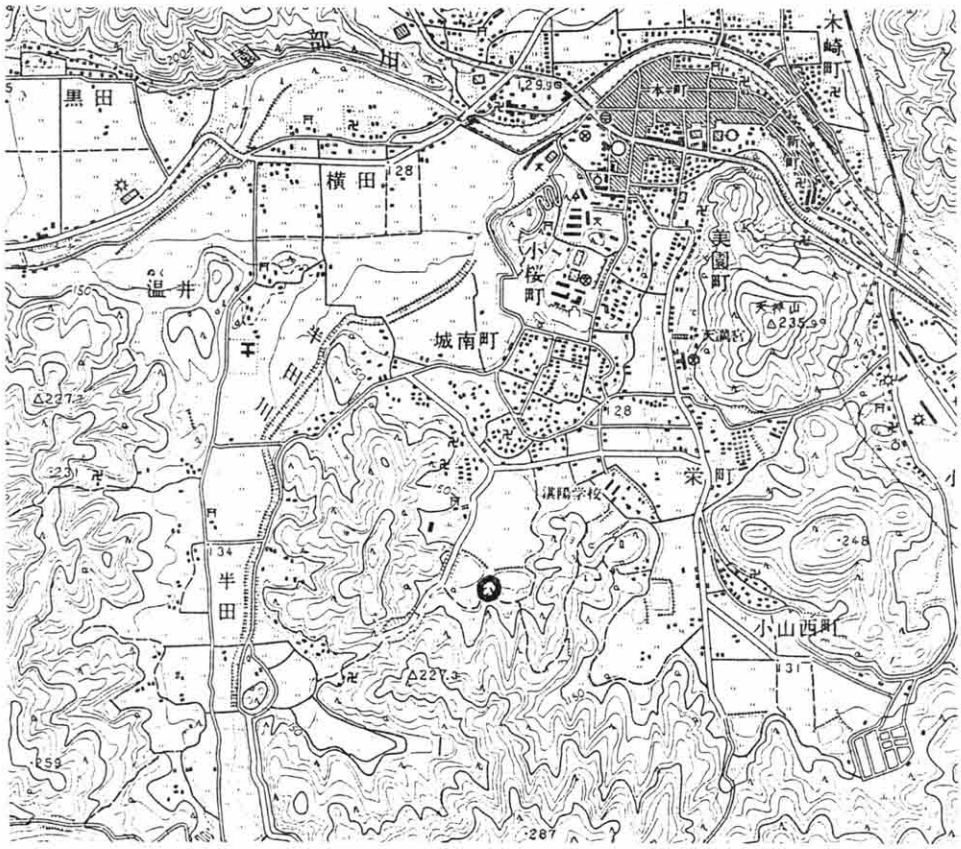
森下　衛

1. はじめに

京都府船井郡園部町の城南から小山東地区にかけての丘陵部に分布する窯跡群は，亀岡市に所在する篠窯跡群と並ぶ口丹波地方での大須恵器生産地帯である。

当窯跡群の中で発掘調査が行われたのは大向2号窯(注1)のみであるが，表面採集による資料をもとに，林 和広・高橋美久二・丸川義広の各氏により諸々の論考(注2～4)が出され，徐々にその全容が明らかとなってきた。

また近年，同志社大学考古学実習室による分布調査が実施され，その報告において窯跡の詳細な分布状況や諸々の問題点が明らかとされた(注5)。



第1図　遺物採集地点位置図 (1/25,000)

それらによると，総数約30基にのぼる窯跡が，壺ノ谷・桑ノ内・高杭・大向の４支群に分かれて分布しており，府下では最も古く５世紀末葉から生産が開始され，６世紀後半に若干空白期間があるものの平安時代までは確実に生産活動が続けられていたとされている。そして，群中には埴輪窯や瓦窯が存在することも指摘されている。

今回紹介する古瓦は，窯跡群中，壺ノ谷支群にあたる園部町城南の丘陵部（第１図）において農道の拡幅工事等により削平された崖面から転落した状態で採集したものである。

当地周辺では，以前から古瓦片が採集されており，(注6) 付近に瓦窯の存在することは推測されていたが，それらは点数も少なく実体はまったく不明であった。今回得た資料も断片的なもので，これをもって園部古窯跡群の瓦生産について論述することはできないが，これらの資料をもとに，これまでほとんど触れられていなかった当地方の瓦生産について紹介したいと思う。

2. 採集状況

採集場所は，先に述べた様に窯跡群の中で西端に位置する壺ノ谷支群にあたる。そして，北に向って開く谷部のほぼ中央，大池・新池の２つの池の間にのびる丘陵の先端部に位置している。周辺にはすでに７基の須恵器窯が確認されており，(注7) 我々も同一丘陵の西側崖面に窯体が露出している部分を確認した。(注8) さらに，その付近には奈良時代の須恵器片が散布していることも確認している。

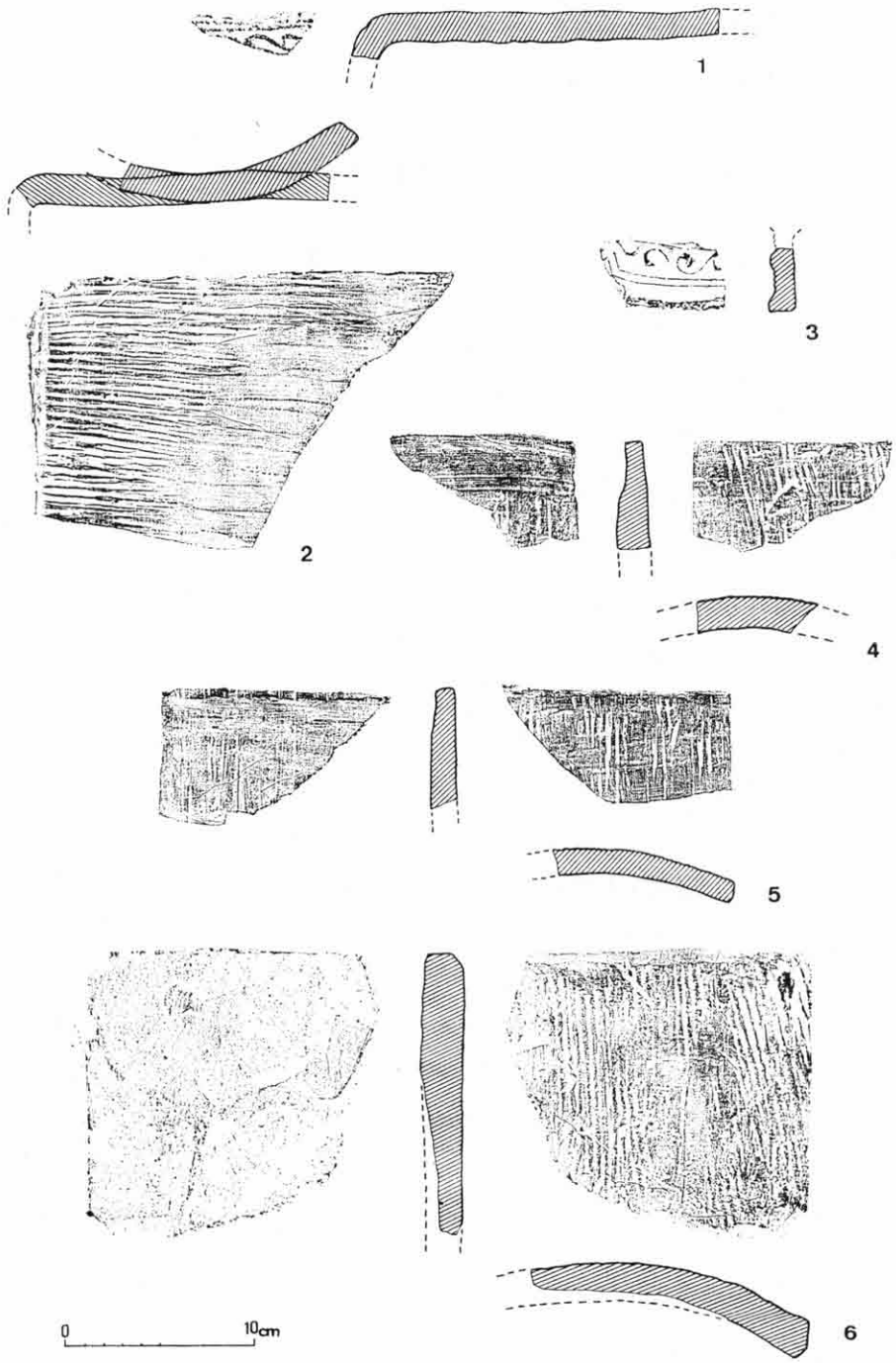
さて，瓦類は，農道拡幅工事等によって大きく削平された丘陵先端部において採集したものであるが，その崖面には土坑状の瓦溜りが観察できる。おそらくこの上方に窯があり，そこからはき出されたものが堆積したものと考えられる。そして，それが削平されたために，土坑内の瓦片が転落したのであろう。(注9)

崖面には，まだ数点の瓦片や須恵器片が露出しており，上方の窯は瓦陶兼業窯であった可能性が高い。しかし，灰原は工事によってそのほとんどが削平されたらしく，崖面にはみることができない。

3. 採集遺物

今回採集した瓦は，軒平瓦３点・平瓦24点（３種類）である。しかし，先述のようにいずれも断片的なものであるため，それぞれの完全な形態を復元しうる資料は皆無である。そのためここでは，主に調整方法が良好に観察できるものを中心に報告する。

軒平瓦（第２図１～３）　いずれも，いわゆる「折り曲げ技法」によるもので，小型品である。



第2図 遺 物 実 測 図 (1)

(1)は，約1/2の平瓦部と瓦当部のごく一部を残すものである。焼成は軟質で黄灰色を呈し，磨滅が著しいため調整方法はまったく観察することができない。ただ一部分残った瓦当文様を復元すると，２重の圏線に区画された内区に唐草文が配されているものである。類例は，円勝寺にみられるとのことであるが，(注10) 本例が細片のため比較は難しい。

(2)は，瓦当の一部を残すものである。瓦当文様は(1)と同種の文様であるようだが，焼きは堅く乳灰色を呈している。

(3)は，折り曲げ部分で欠損しているため瓦当文様は不明である。ただ，平瓦部凸面の調整痕が良好に観察できるため図示した。凸面は，平行叩きを施した後，広端部を折り曲げ瓦当を形成しており，折り曲げ部は横方向に強くなでて仕上げられている。また中央より狭端部側は，縦方向になでを行っている。凹面には布目はみられず，なでによって仕上げられている。焼成は堅く暗灰色を呈している。

平瓦Ⅰ類（第２図４～６）　凸面に平行叩きが施されているものである。この種の平瓦は12点あるが，うち３点を図示した。厚さ 1.8～2.5cm で，凸面は平行叩きを施した後，粗くなでが行われている。凹面は，縦方向のなでによって布目が消され，広端部付近のみ約 1.0～1.5 cm の幅で横方向に強くなでが行われている（４・５）。１点のみ，その横方向のなでを行わず，凸面広端部側に面取りを行った例もある(6)。焼成は堅く須恵質のものが多い。軒平瓦(3)との調整方法での共通性がみられる。

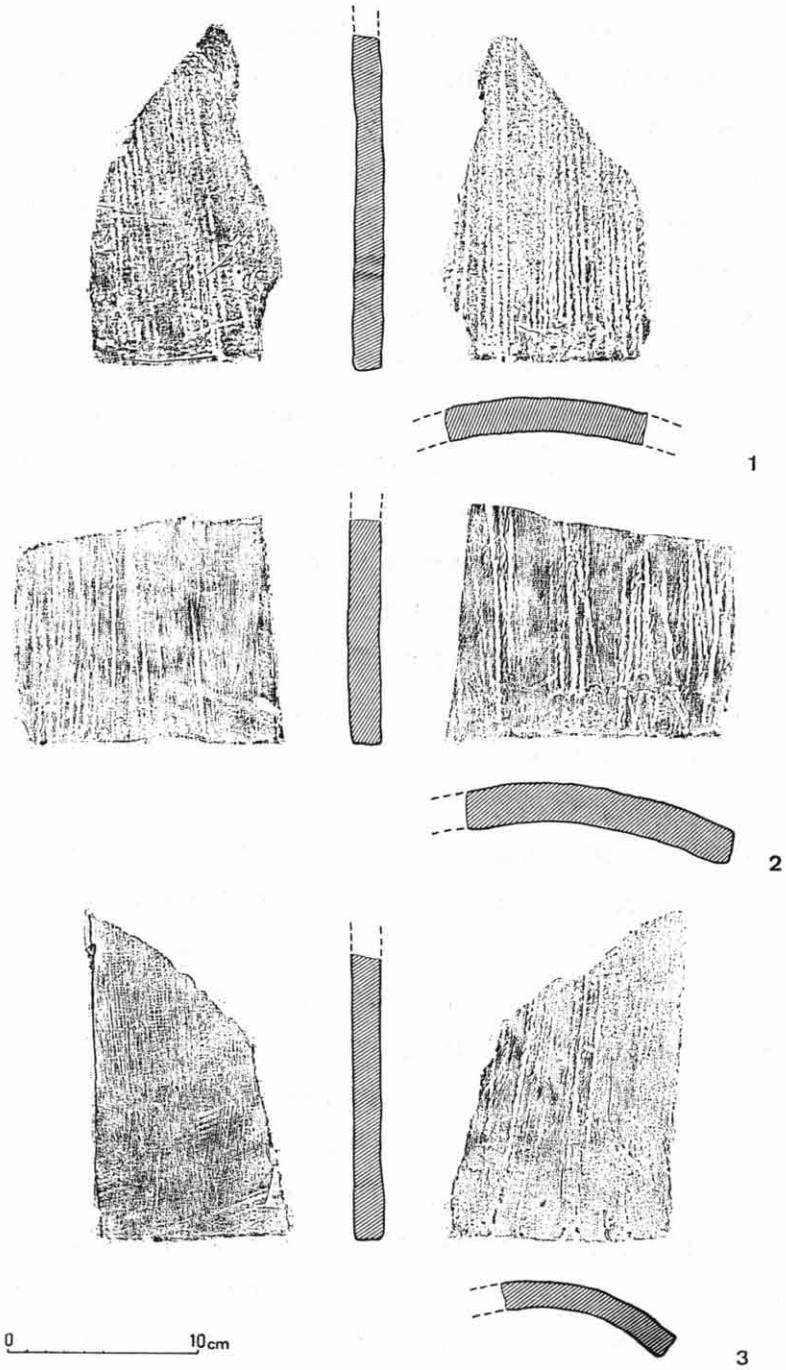
平瓦Ⅱ類（第３図１・２）　凸・凹両面に縄叩きが施されているものである。この種の平瓦は５点あるが，うち２点を図示した。厚さ 1.5～2.0 cmで凸・凹両面とも縄叩きを施した後，縦方向のなでが行われており，凹面に布目はほとんど確認できない。焼成はやや軟質で黄灰色を呈すものが多い。

平瓦Ⅲ類（第３図３）　凸面に縄叩きが施され，凹面には粗い布目が観察できるものである。この種の平瓦は７点あるが，うち１点のみ図示した。厚さ 1.5～2.0 cm で焼成はやや軟質で黄灰色を呈すものが多い。凸面縄叩きを施した後，縦方向になでが行われ，凹面も縦方向に粗くなでが行われている。狭端部付近は凸・凹面とも横方向のなでによって仕上げられている。

これら軒平瓦及びⅠ～Ⅲ類の平瓦は，すべて若干の砂粒は含まれるものの良質の粘土が用いられている。また，平瓦Ⅰ類の数点に離れ砂の使用が認められた。

4. おわりに

以上，今回採集した瓦片の概要を述べたわけだが，このようにわずかな資料をもって園部窯跡群の性格づけを行うことはできない。そこでここでは，いくつかの問題点を指摘し，



第3図 遺 物 実 測 図 (2)

まとめとしたい。

まず軒平瓦をみると，先に述べたように瓦当文様の類例は円勝寺出土品中にみることができる。円勝寺例も同種の「折り曲げ技法」によっている点両者の類似性をみるが，その凸面から瓦当裏面には丹波系(注12)独自の縄叩き調整がみられ，丹波産ではないかと考えられていたものである。これに対し当窯跡採集例は，平行叩き調整の後なでが多用される調整方法によっており，明らかに異なった工人によるものと考えられる。わずかな採集資料をもってこれらの関係について論述することはできないが，現段階ではこの種の瓦当文様を有す軒平瓦は篠窯跡群・園部窯跡群ともに生産されていたであろうと推測されるものの，調整方法からみると両窯跡群は明確に区別されそうである。

また，この軒平瓦と類似する調整方法をみる平瓦Ⅰ類をみてみると，同種のものが平安宮推定民部省跡で出土している。(注14)そしてその報告者は，類例が兵庫県三木市所在瓦窯で出土していることからこれを播磨産であろうと述べている。このように篠窯跡群とは明らかに区別しうる当窯跡例の調整手法は，播磨方面との関連で考える必要があるようである。

上記の調整手法に対し，もう1点当窯跡採集品の中に特徴的なものがある。それは，平瓦Ⅱ類にみられる凸・凹面両面に縄叩き調整が施されるものである。この場合の凹面の縄叩き調整は補足的なものとしてとらえられ，各地での出土例も稀である。しかし当窯跡採集品の中には，細片ながらも比較的まとまって在存しており，この手法が普遍的に用いられていた可能性が高いようである。

以上，今回採集した瓦類から問題点をいくつか述べてみたわけだが，従来，平安後期段階で丹波方面での瓦生産地としては，王子瓦窯を中心とする篠窯跡群を想定していた。しかし，ここ園部にも同時期の瓦窯が存在し，その製品を平安京周辺に供給していた可能性もあることが判明した。そしてそこにみられる手法は，明らかに篠窯跡群のそれとは異なり播磨方面との関連を重視しなければならないものであった。

しかし先にも述べたように，今回紹介した資料は園部窯跡群の一断片にすぎず，さらに今後資料が増加し当窯跡群の実体が明らかとされることを期する他ない。

最後に，今回採集したものはすべて平瓦類（平瓦・軒平瓦）であり丸瓦類（丸瓦・軒丸瓦）は一点も含まれていない。これは単に偶然によるものか，もしくは当窯跡が平瓦類と須恵器のみを焼成していたものなのか，今後明らかにしなければならない点である。また，今回紹介した瓦類のおおよその年代であるが，軒平瓦の造瓦技法としてみられる「折り曲げ技法」は，12世紀後半から13世紀前半頃に完成された段階として多くみられるものだが，その瓦当文様は剣頭文などが主流であり，ここにみられる唐草文は前時代的なものと言える。この様相は，先の円勝寺例などをもとにすでに上原真人氏によって指摘されており，

それによると12世紀前半段階におけるようである。(注15)

なお本文作成にあたっては，上原真人・松井忠春・樋口隆久・引原茂治の各氏から多大な御助言をいただいた。記して感謝いたします。

（森下　衛＝当センター調査課調査員）

注1　堤圭三郎「大向窯跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1971）』京都府教育委員会）1971

注2　林　和広「丹波国古窯跡について」（『史想』第15号　京都教育大学考古学研究会）1970

注3　高橋美久二「園部町の古窯跡群」（『京都考古』第7号　京都考古刊行会）1974

注4　丸川義広「口丹波地方における須恵器生産の開始」（『盾列』創刊号　奈良大学考古学研究会）1975

注5　加藤　謙・山田邦和ほか『園部盆地における考古学的調査―分布調査の成果―』同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会　1981

注6　園部町教育委員会に保管されている。今回，町教育委員会松村賢治氏の御好意により，これらもあわせて報告している。

注7　注5と同じ

注8　この窯跡は，前掲注5によるところの壺ノ谷支群5号窯にあたると思われる。

注9　今回瓦片を採集した窯跡は，前掲注5によるところの壺ノ谷支群7号窯にあたると考えられる。

注10　奈良国立文化財研究所 上原真人氏の御教示による。

注11　細片が多いため，広端部か狭端部かの区別がつかないものも多い。

注12　ここでいう丹波というのは，王子瓦窯を中心とする篠窯跡群南側の瓦窯群のことである。

注13　上原真人氏の御教示による。

注14　戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」（『平安博物館研究紀要』第6輯（財）古代学協会）1976

注15　上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」（『古代研究』第13・14号　元興寺文化財研究所）1978

昭和58年度発掘調査略報

20. ケシケ谷遺跡

所 在 地　福知山市宮小字ケシケ谷

調査期間　昭和58年8月4日～昭和59年3月31日

調査面積　約 1,800 m²

はじめに　本遺跡は近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の一つで，昭和57年6月の踏査により遺跡に掲げられた。当初，表採遺物・歴史的地理・地形から「城館跡」と推定したが，同年の試掘調査では，弥生式土器を中心とする遺物や遺構の一部を確認し，同時代の集落が包蔵されている可能性が強まった。(調査地位置図は30頁)

調査概要　今回の調査で確認した主要な遺構は，以下のとおりである。

弥生時代　竪穴式住居跡 (SB 72・96・102・118・119・135・136・138)，溝 (SD 36・67・74・89 など)，掘立柱建物跡 (SB 163)，土坑

古墳時代　竪穴式住居跡 (SB 02)，溝 (SD 05)

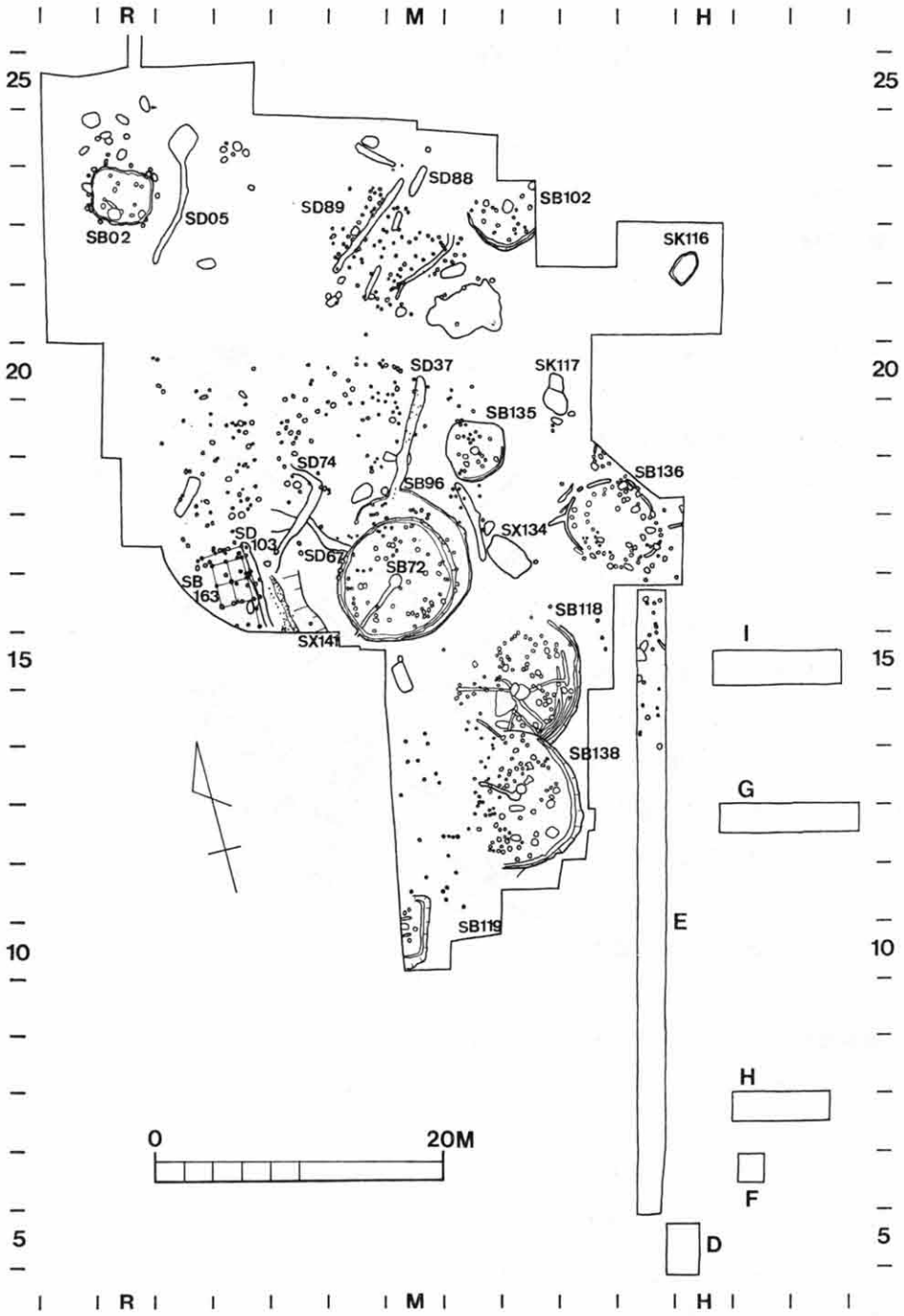
中　　世　溝 (SD 37)

SB 72 は，調査地のほぼ中央で検出したもので，SB 96 と重複する。残存状態は良く，住居壁は最高60cm 遺存していた。SB 136 は柱穴と壁溝の一部を検出したが，数回の建て替えが行われている。SB 118 には東側の壁に平行して4条の壁溝が巡っており，また，それとは別に，SB 138 と重なる壁溝の一部があった。SB 138 は中央に炉跡を有するが，それらに切り合いが認められることと柱穴の並びから，建て替えが行われたことが確認できる。SX 141 は，地山を削って段(高さ25cm)をつくり，西側を平坦に仕上げ，柵列・溝を築いて掘立柱建物跡 (SB 163) を画するものである。

弥生時代の遺構は中期後半～後期，古墳時代のものは陶邑の編年でⅡ－1頃である。出土遺物では，分銅型土製品片・環状石斧・磨製石剣片などが注目される。

ま と め　本遺跡の所在する福知山市は，瀬戸内―日本海ルートとして着目される加古川―由良川ルートに位置している。瀬戸内海にその分布の中心をもつ分銅型土製品は言うまでもなく，出土の弥生式土器がいわゆる「播磨型」のものが大部分を占めることも，当地域の弥生文化の生成・発展を知る上で重要な要素である。

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡だけでも弥生時代の遺構が，宮遺跡・城ノ尾城館跡・奥谷



遺　構　平　面　図

西遺跡で確認されており，集落分布・消長を地域的に把握しうる段階にまで資料が増加してきているといえよう。　（岩松　保）

21. 奥 谷 西 遺 跡

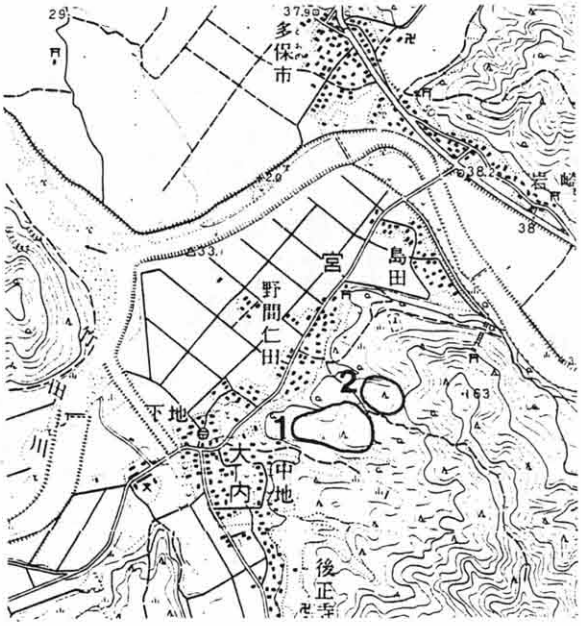
所 在 地　福知山市大字大内小字奥谷

調査期間　昭和58年12月12日～昭和59年３月28日

調査面積　約 1,000 m²

はじめに　今回の調査は，昭和54年度から実施されている近畿自動車道舞鶴線建設に伴う事前調査の一環である。

奥谷西遺跡は，福知山市の南東部，竹田川右岸の丘陵地にあり，標高約 75 m を測る広大な台地上に位置する。調査前の観察により，土墨・溝・井戸・帯曲輪等の遺構の遺存が推定された。なお，調査の結果，着手前の予想以上に遺跡の範囲が広がることが判明したため，結果的には，広大な遺跡の一部を調査・確認したこととなった。



調 査 地 位 置 図（1/25,000）
1. 奥谷西遺跡　2. ケシケ谷遺跡

調査概要　当地は古代「六人部（むとべ）郷」と呼ばれた地に属し，これまでも周辺地で多くの遺跡が調査・確認されている。谷を隔てて南に大内城，北にケシケ谷遺跡が所在し，何らかの関連も考えられた。

調査は，任意の各地点に１m×１m のグリッドを10か所設け，遺跡の広がりを観察した。その上で，幅１m のトレンチを東西 60 m・南北 80 m と十字形に設けた。これらのトレンチの調査の結果，竪穴式住居跡・土墨・溝・ピットなどを検出し，また，丘陵南端部の帯曲輪と考えていた平坦部が，弥生時代の大溝であることを確認した。そこで丘陵南端部，及び住居跡の掘削を開始した。その結果，当遺跡が弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡であることを確認した。

検出遺構　奥谷西遺跡で検出した遺構は，住居跡・溝・土墨・ピット群である。以下，

現在までに検出した主な遺構の概要を説明する。

住居跡1 (SH 01)　直径 8.4 m の円形の竪穴式住居跡である。壁溝も検出でき，遺物も多く残存している非常に遺存状態の良好な遺構である。弥生時代末期のものと考えられる。

住居跡2 (SH 144)　方形の竪穴式住居跡の掘形を検出した。住居跡西辺中央部で，かまど跡と推定される焼土を検出している。一辺 5.5 m を測る。

住居跡3 (SH 145)　一辺 3.6 m の方形の竪穴式住居跡の掘形を検出した。東辺部中央よりに，かまど跡と考えられる焼土がある。

石組遺構 (SX 06)　住居跡3の上面にある平安時代中期の遺物を含む石組遺構であり，この時期の埋葬と関連するものと考えられる。

溝1 (SD 03)　幅約 3 m・深さ 1.5 m を測り，検出長約 12 m を測るU字形の大溝である。さらに調査地域外西側の南平坦部に延びていく様子が地形観察から確認でき，傾斜の緩やかな西側平坦面端部全域を巡っている可能性が大きい。弥生時代中期後半のものと考えられる。その他，土塁とともに巡る溝，及び建物に伴う雨落ち溝等，何本かの溝を確認している。

土坑・ピット　多くの土坑・ピットを検出しているが，詳細は検討中であり，さらに検討を加えれば，中世の建物，弥生時代の建物に関するピット等になると考えられる。

ま と め　奥谷西遺跡は，弥生時代中期から江戸時代（近代）にわたる複合遺跡であり，以下のとおり，時代を追って変遷が見られる。

(1)弥生時代中期後半には，集落の回りに防御施設である溝を設けた大規模な環濠集落が営まれた可能性が高い。この時期の遺物には，多くの土器片とともに多種多様な石器類が出土しており，依然，石器への依存率が高かったことを示す。

(2)古墳時代後期においても住居が存在しており，この時期にも集落が存在した可能性がある。

(3)奈良時代以降の遺物も多く出土しており，特に平安時代～鎌倉時代にかけては，土塁・溝を伴う館等の施設が存在した可能性が極めて高い。谷を隔てた谷側に平安時代～鎌倉時代にかけての館跡である大内城が所在することもあり，当遺跡と大内城との関連も考えなければならない。

(4)江戸時代の伊万里焼が出土した雨落ち溝と考えられるL字状の溝も検出しており，この時期にも何らかの施設が存在したものと考えられる。

（藤原 敏晃）

22. 薬 王 寺 古 墳

所 在 地　福知山市大字多保市小字打越

調査期間　昭和59年3月6日～3月30日

調査面積　約 110 m²

はじめに　当調査は，近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴う事前調査である。

薬王寺古墳は，丘陵尾根の中位に立地する。この丘陵は極めて見晴しが良く，他にも古墳と思われる地形の高まりや，城館跡の想定が可能な平坦地や土塁も存在している。

調査概要　(1)墳丘　直径 10 m 前後の円墳である。墳丘の東（尾根の上方）には，浅いが広い溝が掘られ，盛土に供すると共に，墳丘を限るものであったと思われる。

(2)埋葬施設　墳頂部の中央は調査が不充分であったが，西端において2基の小型主体部を検出した。いずれも土坑墓であり，棺の痕跡は認められなかった。北の2号主体部（1 m ×0.4 m）がより古く，これを切って1号主体部（1.5 m×0.6 m）が掘られている。前者からの出土遺物は全くなかったが，後者からは，須恵器7点（杯蓋2・杯身2・高杯蓋1・高杯1・短頸壺1）と土師器1点（甕）が出土した。須恵器の型式は陶邑Ⅱ型式第1段階前後に比定され，6世紀の前半ないし中葉頃のものと見られる。

ま と め　薬王寺古墳は，尾根上に立地し，斜面の方向に直交して三日月形に溝を掘り，その土砂を下方に盛ることによって墳丘を形成している。この種の古墳は，隣りの綾部市高谷古墳群や最近調査された兵庫丹波の氷上郡春日町松の本古墳群で多く知られている。薬王寺古墳も周辺の古墳状隆起と共に古墳群を形成すると考えられ，また時期的にも上記古墳群と併行していることなど，最近になって類例が増加しつつある形態の古墳である。

本例のような古墳は，外観によって古墳として認識し難い場合が少なくないと思われ，また上記松の本古墳群には，墳丘をもたない箱式石棺の検出も報じられており，今後とも，尾根上の遺跡調査には充分の注意が求められよう。　（小山 雅人）

調査地位置図（1/25,000）

23. 重要文化財 三宝院宝篋印塔基壇 <図版>

所 在 地　京都市伏見区醍醐上端山町

調査期間　昭和58年11月22日～昭和59年3月17日

調査面積　38.5 m²

はじめに　重要文化財三宝院宝篋印塔基壇は，三重の壇から成っており，一重目（最下段）は，1辺 4.8 m で地覆・葛・束・羽目石を備えた壇上積みで，二・三重目は葛石だけで囲んだ低い壇となっている。また，一重目基壇上には各面に3個の宝珠を配している。この基壇上に置かれる宝篋印塔は，さらに上下二石からなる二重の台座を有し，下の台座は二石を合わせて方形とし，複弁の反花座が陽刻され，上の台座には側面四方に獅子と牡丹を配して下端に単弁の蓮弁を刻み出した受座からなっている。塔は台座から相輪頂部まで，2.3 m であるが，大規模な基壇上に安置されているため，全体で 3.27 m の高さとなり，雄大さをかもし出している。

寺伝によると，この宝篋印塔は，足利尊氏が帰依した醍醐寺第65代座主賢俊（1357年没）の菩提を弔うために建立されたものとされており，鎌倉時代後期の様式を伝える類例のないものとして昭和31年，宝篋印塔・基壇ともに重要文化財に指定された。しかし，近年，基壇の敷石がゆるんだり，相輪の一部が損傷するなどの事態が起きたため，解体修理が実施されることになった。修理に際しては，その影響が下部にまでおよぶため，下部遺構確認のために，当調査研究センターでは，京都府教育委員会の委託を受けて，事前に発掘調査を実施した。

調査地位置図（1/50,000）

調査概要　調査は，地覆石を残して三重の基壇を構成しているすべての石材を除去し，基壇築造時の盛土面の露出作業より開始した。その結果，一重目基壇の宝珠を配した板石の下には，拳大の石・瓦質土器(蓋)片・甕片が多数裏込めとして入れられていた。この裏込めを除去した段階で部分的ではあるが，甕口縁を検出したため，12か所の宝珠を配した板石の下には，甕による埋葬施設があるも

のとして調査を進めていった。そうすると，宝珠を配した板石の下には，①大甕を埋納したもの５か所，②やや小型の甕を埋納したもの２か所，③大甕片を利用して埋葬施設を区画したもの２か所，④甕片・瓦質土器片(蓋)を含む河原石の集中部分が積石的な状態を示していたもの２か所，⑤木櫃のみを直接埋葬していたもの１か所を確認した。いずれも内部には木櫃が納められていたが，①・③と④の１か所は複数以上の木櫃が存在し，他はすべて１か所のみ木櫃を確認した。大甕内で木櫃以外に蔵骨器として使用されていた土師製鍋の出土も１例確認した。各木櫃内からは，鉄製釘が少量確認されたが，一部の木櫃内部からは，銅銭や土師器皿等が検出されたものもある。

一方，台座下三重目基壇・二重目基壇中央にはそれぞれ壺が埋納されており，内部は火葬骨で充満していた。三重目基壇で確認したものは，常滑大甕片を，二重目基壇のものは扁平な河原石を蓋として利用していた。一重目基壇中央に相当する部分では，甕・壺類の埋納は認められなかったが，大形の土坑が検出され，甕片が数点出土した。これは大甕を抜き取ったものと考えられ，後に地山の黄褐色混礫粘質土を充填し，叩きしめていた。

以上が基壇内で確認したものであるが，基壇築造状況を調べるため基壇たちわりを行った結果，基壇外側にも地覆石を挟んで一重目基壇下部に基壇内埋葬施設と対になるような形で埋葬施設を確認した。宝篋印塔基修復工事の関係上，周囲全体を掘削することはできなかったが，東辺で２か所・西辺で３か所・南辺で３か所・北辺で２か所の計10か所を確認し，うち８か所を調査した。基壇各コーナーも調査を行ったが，埋葬施設は確認されなかった。このことから，一重目基壇同様外側にも12か所の埋葬施設の存在が明らかとなった。８か所の埋葬施設は，甕の抜き取りが行われ，火葬骨と甕底部か甕片が若干残されていた。まったく何も残されずきれいに抜き取られたものも１か所ある。この掘形内に残されていた甕片は，すべて一重目基壇で検出した甕に接合され，抜き取り後移し変えられている。また，基壇内で確認した木櫃は，そのほとんどが複数以上であったのに対し，基壇外側ではすべて１櫃しか確認されなかった。

ま と め　この宝篋印塔基壇は，賢俊一人のために築かれたものではなく，三宝院に縁の深い人々や僧侶の共同墓と考えられ，一重目基壇に12個配置された宝珠は，墓の存在を表わす墓標的なものとして配置されたと思われる。そして，基壇上に建立された宝篋印塔は，共同墓全体の供養塔と考えられる。埋納されていた甕類には，常滑・信楽・備前の製品があり，時期も12世紀後半から14世紀後半におよぶ。このように，この地に墓が形成され始めてから，現在の状況を呈するまでには，大きくは３段階の形成過程が考えられる。この宝篋印塔は，極めて特異ともいえる下部構造を持ち，今後，さらに検討を加えなければならない多くの要素を残している。　（増田 孝彦）

24. 隼 上 り 遺 跡

所 在 地　宇治市菟道東隼上り31

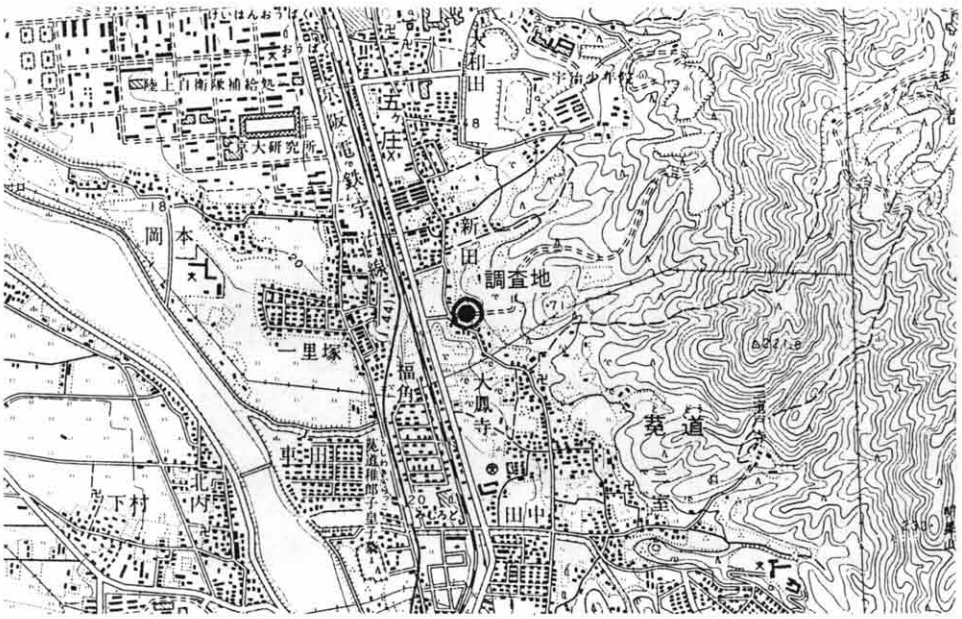
調査期間　昭和58年10月20日～昭和59年３月31日

調査面積　約 5,000 m²

はじめに　隼上り（はやあがり）遺跡の発掘調査は，日本道路公団が計画・施工している京滋バイパス建設に伴う事前調査である。

当調査地は，宇治市中央部，宇治川東岸にあり，五雲峰から西方へのびる洪積世丘陵の先端に位置し，礫層と粘土層からなる大阪層群上に立地している。また，周辺には，弥生時代後期の住居跡を検出した羽戸山遺跡，飛鳥時代の瓦窯・工房跡が確認された隼上り瓦窯跡，白鳳時代に創建された大鳳寺跡などがあり，調査地がこれらの遺跡と関連していることが予想された。

調査概要　土層は，基本的に置土・黒褐色土層・赤褐色土層・黄褐色土層の４層に分けられ，黒褐色土層は近世，赤褐色土層・黄褐色土層は飛鳥・白鳳時代が主体となる。近世資料は，遺構・遺物とも質的・量的に充実しており，周辺地域における基本資料を得たと言える。中世は，瓦質土器の三足盤などの新資料を得た。飛鳥・白鳳時代は，柱穴・土坑

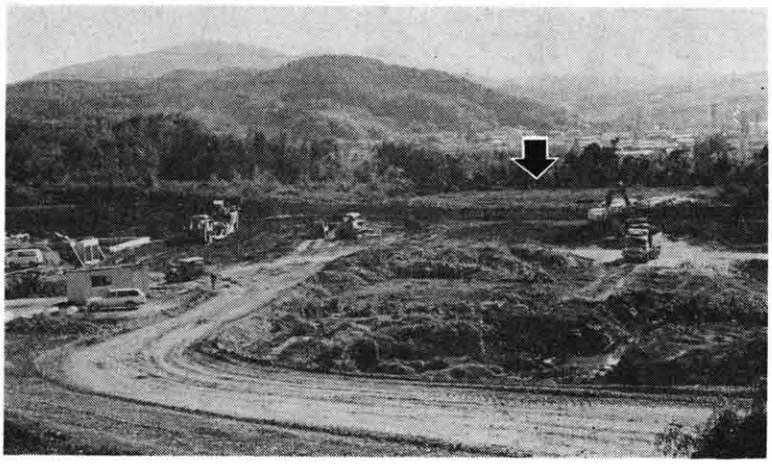


第１図　調 査 地 位 置 図（1/25,000）

・焼土坑などが主な遺構であり，出土遺物には隼上り瓦窯で焼成された軒丸瓦・平瓦・丸瓦・須恵器の他，斜格子の叩きを有する平瓦・土師器・製塩土器などがある。これらの遺物は，飛鳥・白鳳時代における当遺跡の性格を考える上で極めて重要である。ここでは憶測の域を出ないが，次の4点を述べ総括としたい。(1)柱穴・土坑より隼上り瓦窯の製品が出土する。特に，熔着した須恵器や完形に近い丸瓦が出土することから，隼上り瓦窯の製品を一時的に保管する倉庫が存在した可能性が高い。(2)瓦・須恵器以外に土師器も出土しており，また，製塩土器も出土している。これは，隼上り瓦窯に関係をもっていた工人が居住していたことを示す。つまり，当地は隼上り瓦窯の工人集団の集落と，(1)に述べた倉庫が共存し，隼上り瓦窯の生産体制において，倉庫管理などの重要な役割を果たしていたものと考えられる。(3)焼土坑において検出した白色粘土は，今後，分析の結果が必要であるが，瓦窯の製品と関連を示すデータが出れば，粘土をも保管していた可能性が出てくる。(4)柱穴から出土する白鳳期の遺物には，須恵器・土師器・斜格子叩きを凸面に有する平瓦などがあり，特に，平瓦は大鳳寺との関連を示す資料である。どのように関連していたかについては十分検討しなければならないが，隼上り瓦窯の工人集団が大鳳寺創建にあたり一つの役割を設定され，機能していたと考えられる。現在，大鳳寺跡の瓦は宇治山本瓦窯で焼成されていたことが確認されているが，当地周辺でも同様な窯が造営されていたかもしれない。

最近，生産遺跡の発掘調査で窯体構造や出土遺物の型式編年は高いレベルで研究されており，実態が明らかにされつつあるが，一方，生産体制がどのように維持されていたかは，それを説明する資料に乏しいのが現状である。今回の調査では，窯と倉庫，倉庫と集落の関係を部分的にではあるが明らかにできた。今後，遺物整理の段階で，正確にそれらの関係を復元する必要がある。

（小池　寛）



第2図　調　査　地　遠　景（隼上り瓦窯跡から）

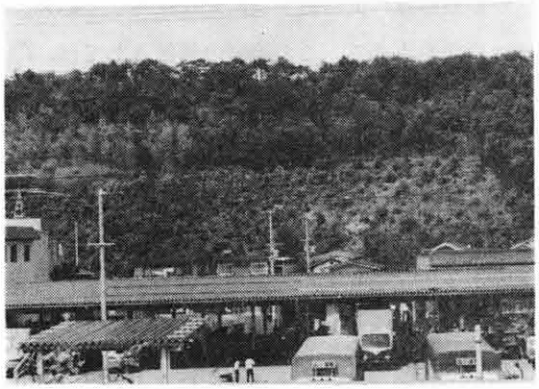
府下遺跡紹介

20. 土師新町城跡（仮称）

この城跡は，福知山市土師（はぜ）新町に所在し，昭和59年3月20日，当調査研究センターの伊野近富調査員ほかによって確認された。現時点では正式な名称が付されていないので，所在地の地名をとって，土師新町城跡と仮称することとした。

この城跡は，福知山市街地から南東約1.5kmの地点にある。長田野丘陵から北西方向にのびる小尾根上に位置する。標高は約35～40mである。

第1図　土師新町城跡位置図（1/25,000）



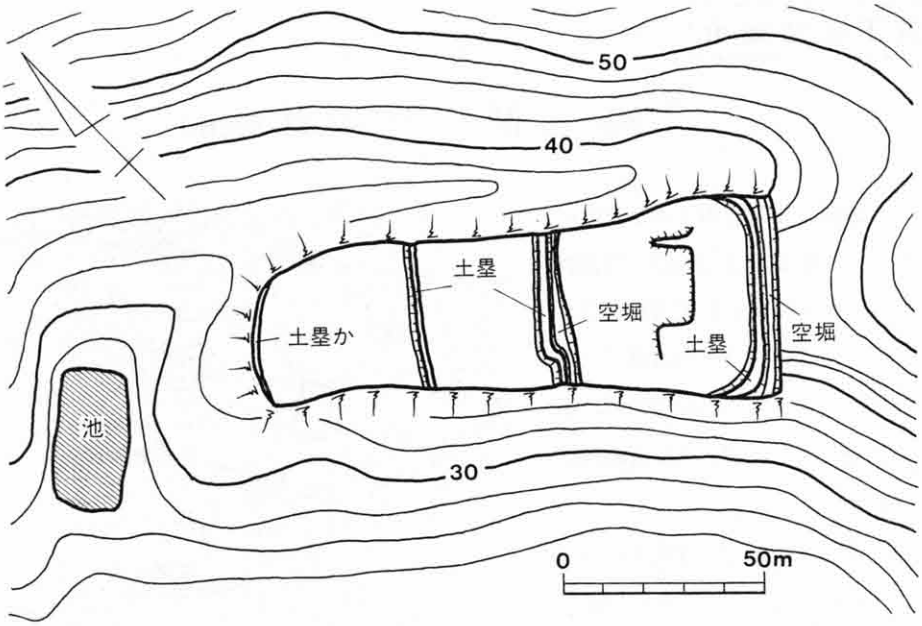
第2図　城跡全景（南西から）

城跡は，土塁および空堀で区切られた三つの平坦地からなり，これらの平坦地は南東から北西方向に連郭式に並ぶ。全長約140m・幅約40m前後である。便宜的に，南東側平坦地を第1郭，中央平坦地を第2郭，北西平坦地を第3郭とよぶ。

第1郭は，他の郭よりやや高くなっており，面積も広く，主郭とみられる。南東側は空堀によって背後の丘陵から切りはなされ，土塁が築かれている。中央部付近に「コ」の字状の窪地があり，主要な建物の敷地ともみられる。

第1郭と第2郭は空堀によって区切られ，第2郭南東側には土塁が築かれる。この土塁は南側で屈曲し，第2郭南端部が小規模な枡形状になる。現状では断定できないが，おそらく，この地点が第2郭から第1郭への入口となっていたものであろう。

第2郭と第3郭は土塁によって区切られている。第3郭北西側にはわずかな畝状の盛り



第3図　土師新町城跡模式図

上りがみられるが，土塁とは断定できない。なお，現在，尾根の西側裾から第3郭への登り道があるが，旧来のものであるかはわからない。

この城跡は，山陰道が長田野丘陵裾から福知山盆地へ入る箇所を扼する場所にあり，重要な位置を占める。この地域の城館としては，『丹波志』に記された芦田氏の城館がある。同書によると，天正年間頃の城主を芦田平兵衛と伝え，大内城主堀氏に一味し大内村小屋の奥というところに集結していた時，敵の夜討ちにあい討死したとする。この時に城館も城主と運命をともにしたことであろう。『日本城郭大系』には，この城館が「土師城」として記載され，この城跡の北西約 250 m の福知山高等学校第2グラウンドの地に比定されている。大正初期頃まで遺構が存在していたというが，現在は消滅している。『丹波志』にみられる芦田氏の城館の形態・規模は，今回紹介する城跡の遺構と異なる様子であり，芦田氏の城館については『日本城郭大系』に従う。

この城跡の築城年代は，史料・出土遺物がなく確定できないが，第2郭南東側の土塁の形態から，戦国時代とみられる。年代的には土師城と同時期のものとみられ，近接して存在することから，何らかの関係があるものとみられる。規模を比較すると，土師城が本城であり，この城跡が出城とみることもできる。当調査研究センターが調査した大内城跡と関係する城跡ともみられ，興味深い城跡である。

（引原 茂治）

21. 福 知 山 城 跡

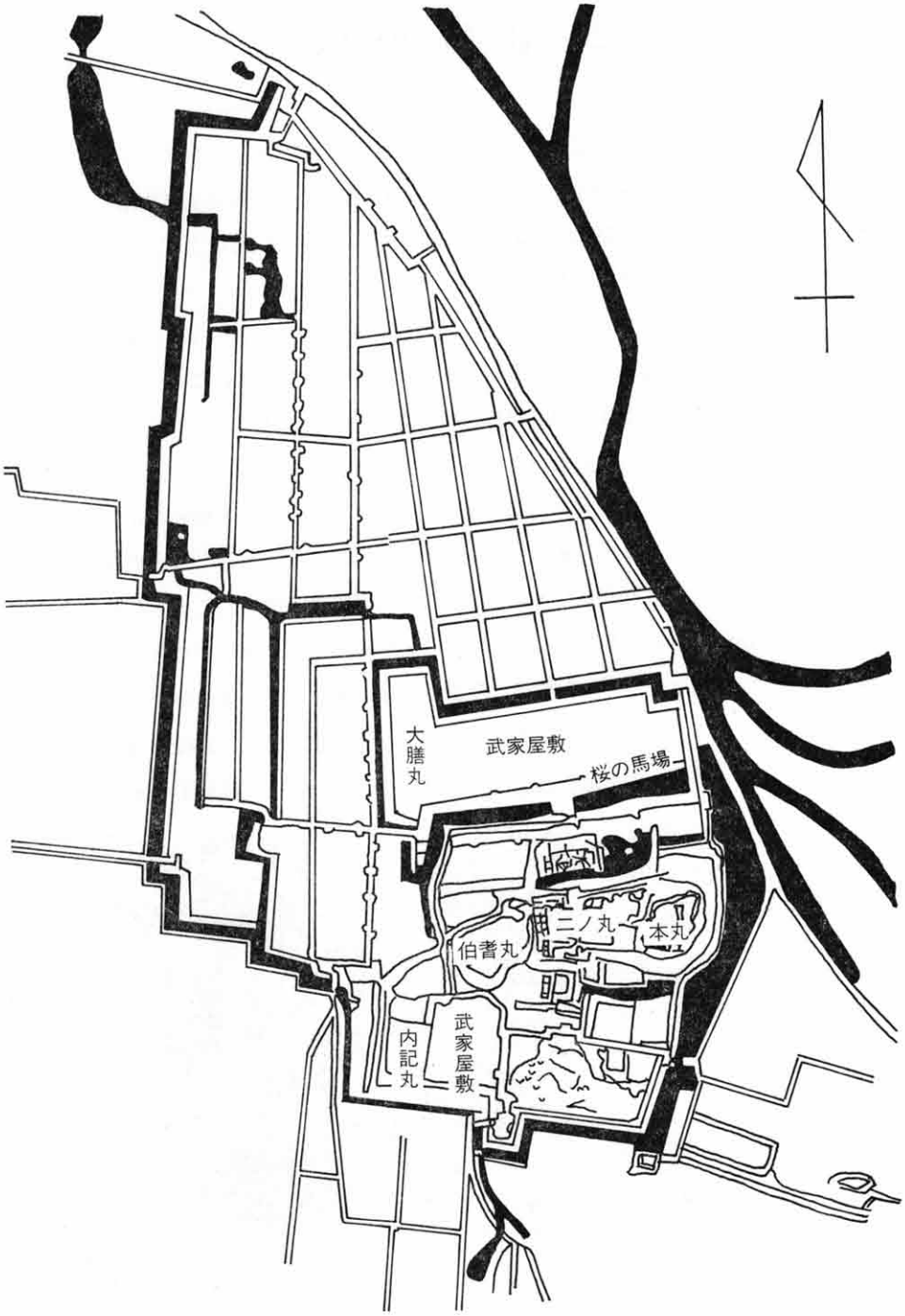
福知山城跡は，福知山市内記に所在し，横山城とも臥竜城とも呼ばれる近世平城である。福知山城の本格的な築城・整備は，天正7（1579）年の明智光秀による横山信房打倒以後であるが，それ以前にも城塞的なものはあった。江戸初期の伝えによると，塩見大膳頼勝が朝暉ケ丘丘陵に掻上城という砦を築き籠ったのがその始まりという。その後，頼勝の子頼氏もこの城に住んだといわれているが，当時は「福知山」の名もなく，頼氏の改姓後の姓・「横山」をとって「横山城」と呼ばれていた。いずれにせよ，この当時の城は，城砦のようなもので，戦闘を第1の目的に築城されたと思われる。

天正7年の明智光秀の丹波入部は，それまでの様相を一変させることになった。光秀は，明智秀満（三宅弥平次）と藤木権兵衛を城代として，本格的な近世城郭の造営に着手した。津田宗及の『茶湯日記』の天正8（1580）年4月条には，光秀自身もこの地を訪ねて，福知山城で七五三の膳で振舞われたとあり，かなり造営が進んでいたことを窺わせる。しかし，天正10（1582）年の本能寺の変後，羽柴秀吉が福知山城に来ていた秀満の父親を捕え，京都の粟田口で処刑するなどした結果，明智一族は光秀と共に没落した。

光秀の没落後，丹波は秀吉の養子秀勝が領したが，福知山城は，北政所の叔父杉原家次が城主になった。まもなく，家次は病没し，同じく福知山の田野城城主であった小野木縫殿助重勝が3万石で入部してきた。しかし，小野木重勝は，関ヶ原の戦で西軍に属して，細川幽斎を攻めたため，幽斎の子忠興は，福知山城を陥落させ，重勝を丹波亀山の寿仙庵にて切腹させた。

以上の経過から判断されることは，明智光秀以後に近世城郭が形成されはじめるが，期間が短いこともあって，本格的な城下町の完成等はなかったということである。これまでの研究によると，当城の

第1図　福知山城跡位置図（1/50,000）



第2図　福知山城復元略図（松平時代）

本図は『福知山市史』2巻　図52をもとに作成した。

完成は，有馬豊氏の時代とされている。

関ケ原の戦以後の歴代城主は，別表のとおりであるが，当城の絵図は，有馬時代・稲葉時代・松平時代の3種類が現存している。それぞれで内城部が若干異なってはいるものの，全体のプラン・堀の位置等は全く変化がない。現在の福知山市は，当城をもとにしており，これらの絵図と比べてみると比較的よく地割を残しているのがわかる。

年　　紀	城　主	備　　考
慶長5(1600)年	細川　忠興	
慶長5～元和6(1620)年	有馬　豊氏	6万石
元和7(1621)年	小堀　政一	
元和7～寛永元(1624)年	岡部　長盛	丹波亀山より 5万石
寛永元～慶安元(1648)年	稲葉　紀通	摂津中島より 4万7千石
慶安2(1649)年～寛文9(1669)年	松平　忠房	刈谷より 4万5900石
寛文9年～	朽木　稙昌	明治まで朽木氏 3万2000石

歴代城主表（朽木氏は初代のみをあげた）

第2図は，松平時代の絵図をもとにして作成した略図であるが，これによると，東側には由良川・土師川という自然河川と人工の堀があり，しっかり固められている。人工の堀は西側に向かって3重になっており，主にこの方面からの敵の侵入を防ぐかたちになっている。また，本城部もそれにあわせて内記丸・伯耆丸・二の丸・本丸の4つが連郭式に構成されている。本丸は，天守閣の付近にあり，その西側に二の丸・伯耆丸が続いている。

天守閣は，三層の建物（但し，内側からみると4層にみえる）で，北側へ続櫓・小天守閣が並んで建っていた。普通，天守閣は，永禄12（1569）年に織田信長が築城した二条城に始まるので，光秀時代もしくは杉原家次時代にできていたとすれば，かなり古いものといえるであろう。この天守閣を含めて，本丸・二ノ丸・対面所・馬屋・蔵などはそのまま朽木時代まで引きつがれていく。これらの御殿のうち，本丸・二ノ丸・対面所については間取図が現存しており（島原市松平文庫），当時の建物がどのようなものであったかを復原する上で貴重な史料である。

武家屋敷は，大膳丸・内記丸のそれぞれ東側にあって，城下町に集住した町人層とは一線を画された位置にある。武家屋敷では，身分の差によって屋敷地が異なる。一門や家老といった上級武士は城郭内に，中級家臣はその周辺に，足軽などの小者は郭外に屋敷を与えられていた。福知山城は，上記付表にもあるように，時期により石高が変わるので，それによって召抱えられる家臣の数も変化し，しだいに小さくなっていったと思われる。

なお，現在，福知山市では天守閣及び続櫓・小天守と復原再建する予定である。

（土橋　誠）

参考文献

『福知山市史』第2巻　1982
『日本城郭大系』11　京都・滋賀・福井　新人物往来社　1980

長岡京跡調査だより

長岡京跡における発掘調査の情報交換を目的として，毎月当調査研究センターの長岡整理事務所で行ってきた長岡京連絡協議会は，本年の４月に当調査研究センターの庁舎が向日市に移ったのを契機に，５月からは新庁舎内で開催することになった。４月から６月の３か月間に行われた長岡京跡の調査は，下表のとおり長岡宮跡３件，長岡京跡右京域９件，左京域２件の計14件である。

以下，４月25日・５月23日・６月27日の協議会で報告された調査のうち，主だったものについて略記する。

宮内第149次　（２）　向日市教育委員会

宮域の北限に当り，長岡京期の排水用のものと考えられる溝等を検出した。遺物は，6720型式や北白川廃寺で出土している21葉素弁の葉剣状をした軒丸瓦が出土している。

宮内第150次　（３）　向日市教育委員会

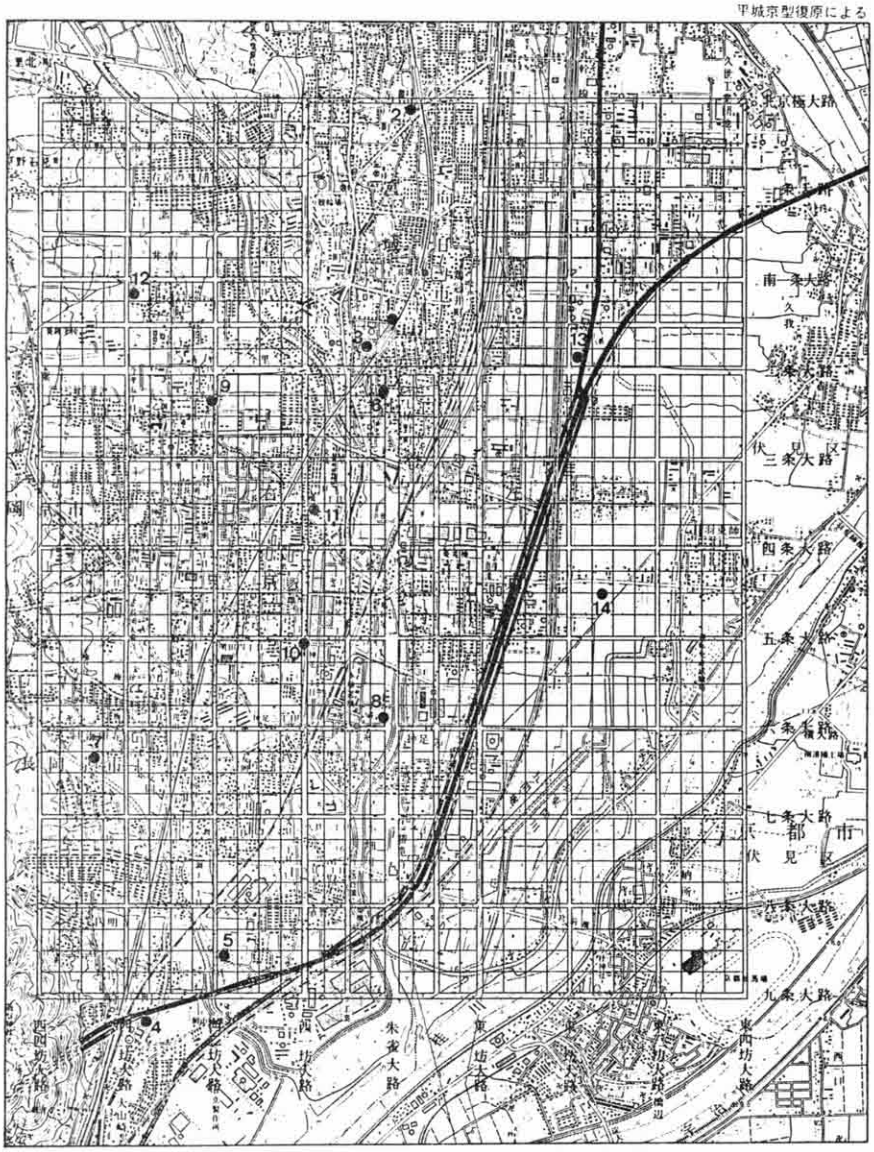
昨年度調査した長岡宮跡第140次調査地の西接地で，昨年度検

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第148次	7AN10L	向日市上植野町南開62-3	向日市教委	59. 4. 5～ 5. 15
2	宮内第149次	7AN6D	向日市寺戸町初田23	〃	5. 7～ 5. 31
3	宮内第150次	7AN15M	向日市上植野町御塔道	〃	6. 1～
4	右京第159次	7ANSDD-2	大山崎町円明寺百々１	大山崎町教委	4. 10～
5	右京第160次	7ANSMD	大山崎町円明寺松田15	〃	4. 12～ 4. 15
6	右京第161次	7ANFNM-2	向日市上植野町野上山	向日市教委	5. 21～ 6. 9
7	右京第162次	7ANOKD	長岡京市下海印寺上内田	(財)長岡京市埋	5. 22～ 6. 25
8	右京第163次	7ANMKI	長岡京市東神足２丁目	〃	5. 28～
9	右京第164次	7ANITT-9	長岡京市今里４丁目3-4	〃	5. 25～ 6. 5
10	右京第165次	7ANKSM-3	長岡京市開田２丁目	(財)京都府埋	5. 21～ 6. 14
11	右京第166次	7ANIMI	長岡京市一文橋１丁目12-1	(財)長岡京市埋	6. 18～
12	右京第167次	7ANGHD-3	長岡京市井ノ内広海道	〃	6. 26～
13	左京第112次	7ANEUK	向日市鶏冠井町馬司12-1	向日市教委	5. 29～
14	左京第113次	7ANXOK	京都市伏見区羽束師古川町	(財)京都市埋	4. 12～ 6. 23

長岡京跡調査地一覧表

長岡京条坊復原図

甲城京型復原による



0 1000 2000m

数字は本文（　）内と対応

出した東西方向の溝の延長が確認された。

右京第159次　（4）　大山崎町教育委員会

西国街道とほぼ平行する平安時代前期の溝等を検出している。金銅製の鉈尾や石製の丸鞆・木簡・銭などが出土した。

右京第161次　（6）　向日市教育委員会

朱雀大路の西側溝とその西側の築地に伴う雨落ち溝を検出した。西側溝（SD 16103）は，幅約 1.8 m・深さ約 0.8 m を有し，朝堂院中軸から溝心々までは 27.3 m を測る。築地の雨落ち溝（SD 16104・SD 16105）は，溝心々間で 5.8 m を測り，西側の雨落ち溝には多量の瓦が落ち込んでいた。

右京第162次　（7）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

奈良・平安時代の掘立柱建物跡や柵列を検出した。

右京第163次　（8）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

勝竜寺城の外郭の土塁が残っており，この土塁を中心に調査を進めている。現在，勝竜寺城に伴うと思われる輸入陶磁器や唐津・美濃・信楽・備前・伊万里などの国産陶磁器類の他，弥生土器・須恵器・土師器等も出土している。

右京第165次　（10）　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

西一坊大路の推定地で，右京第77次調査で検出している西一坊大路の東西両側溝の北の延長を確認した。東西両側溝（SD 16503・SD 16507）とも幅約 1～1.1 m・深さ約 0.3 m を測る。西側溝には，径 0.15～0.2 m の小ピットが東西の傾斜面に対応するように並んでいた。

左京第113次　（14）　(財)京都市埋蔵文化財研究所

平安時代と古墳時代の水田の畦畔を検出した。平安時代の水田の畦畔は，南北方向及びそれに直交して東西方向に走り，乙訓郡条里の六条水将里六ノ坪に当る。東西方向に走る畦畔は，六ノ坪の中央を横切る畦畔である。古墳時代の畦畔は，北西から南東方向，及びそれに直交して走る。また弥生土器片も出土している。

（山口　博）

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
組織および職員一覧（59.6.30現在）

理事長

福山敏男（京都府文化財保護審議会委員 元京都大学工学部教授）

副理事長

樋口隆康（京都府文化財保護審議会委員 元京都大学文学部教授）

理　事

荒木昭太郎（常務理事・事務局長）
岸　俊男（奈良県立橿原考古学研究所長 元京都大学文学部教授）
藤井　学（京都府立大学文学部教授）
川上　貢（京都府文化財保護審議会委員 京都大学工学部教授）
足利健亮（京都大学教養部助教授）
中沢圭二（京都府文化財保護審議会委員 京都大学理学部教授）
佐原　真（奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長）
原口正三（大阪府立島上高等学校教諭）
藤田价浩（財団法人京都古文化保存協会 理事長）
井上裕雄（京都府文化芸術室長）
武田　浩（京都府教育庁指導部長）
東条　寿（京都府教育庁指導部 文化財保護課長）

監　事

岡田忠司（京都府出納局長）
草木慶治（京都府監査委員事務局長）

事務局長　荒木昭太郎

総務課

課長	白塚　弘	
会計主任	安田正人	
主事	古澤俊彦	
嘱託	中西　修	冨田敦子
〃	杉江昌乃	

調査課

課長	堤　圭三郎		
課長補佐	杉原和雄		
企画資料担当	調査員	引原茂治	田中　彰
	〃	土橋　誠	
	嘱託	長関和男	
第1担当	主任調査員	辻本和美	
	調査員	伊野近富	竹原一彦
	〃	岩松　保	山下　正
	〃	藤原敏晃	
第2担当	主任調査員	水谷寿克	
	調査員	石井清司	村尾政人
	〃	竹井治雄	岡崎研一
	〃	田代　弘	森下　衛
第3担当	主任調査員	長谷川　達	
	調査員	山口　博	増田孝彦
	〃	石尾政信	三好博喜
第4担当	主任調査員	松井忠春	
	調査員	小山雅人	戸原和人
	〃	黒坪一樹	小池　寛
	〃	荒川　史	

センターの動向（59. 4 ～ 6）

1.　できごと

4. 3～16　新規採用職員研修実施

4. 17　木津川河床遺跡（八幡市）発掘調査開始

4. 18～20　新庁舎へ移転作業実施

4. 21　新庁舎での事業開始

4. 23　篠窯跡群（亀岡市）出土遺物整理作業開始

4. 25　長岡京連絡協議会開催

4. 26　ケシケ谷遺跡（福知山市）昭和58年度発掘調査関係者説明会実施

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議一於長岡京市一出席（荒木事務局長，白塚総務課長，堤調査課長，安田会計主任）

5. 2　京都府埋蔵文化財事務所，向日市文化資料館，向日市立図書館の合同完工式が京都府教育委員会，向日市により挙行される。

5. 7　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一多保市城跡，奥谷西遺跡（福知山市）一発掘調査開始

北金岐遺跡（亀岡市）遺物整理開始

千代川遺跡（亀岡市）第７次発掘調査＜府道拡幅工事＞開始

5. 8　石本遺跡（福知山市）発掘調査開始

5. 17　篠窯跡群（亀岡市）発掘調査開始

5. 21　長岡京跡右京第165次（長岡京市一府道開田神足線拡幅工事）発掘調査開始～6. 14

5. 23　長岡京連絡協議会開催

6. 6　長岡京跡右京第165次調査関係者説明会実施

6. 11　昭和58年度会計監査実施さる。

6. 18　第10回役員会及び理事会開催一於向日市文化資料館研修室一福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，藤井　学，川上　貢，足利健亮，原口正三，藤田价浩，東条　寿各理事，草木慶治監事，荒木昭太郎常務理事出席

6. 21～22　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会一於和歌山市一出席（荒木事務局長，白塚総務課長，中西嘱託）

6. 23　長岡京跡右京（長岡京市一府道大山崎栗生線拡幅工事）立会調査開始

6. 27　長岡京連絡協議会開催

2.　普及啓発事業

6. 30　第22回研修会一於向日市文化資料館一開催（発表者及び題名）　丸山竜平「滋賀県の埋蔵文化財保護と発掘調査の現状」，大村敬通「兵庫県の埋蔵文化財保護と発掘調査の現状」，井藤　徹「大阪府の埋蔵文化財保護と発掘調査の現状」

6. 30　『京都府埋蔵文化財情報』第12号刊行

3.　人事異動

4. 1　三好博喜，荒川　史（以上調査課調査員）採用さる。

4. 16　常務理事・事務局長栗栖幸雄氏退職

される。

4.17　荒木昭太郎氏常務理事に委嘱，事務局長に採用される。

4.17　加藤一治氏監事を解嘱される。

4.17　草木慶治氏監事に委嘱される。

受贈図書一覧（59.3～5）

岩手県立埋蔵文化財センター	考古遺物資料集 第4集
(財)いわき市教育文化事業団	ふるさとの考古資料
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	薮田東遺跡，同道遺跡，熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡，研究紀要1
大宮市遺跡調査会	鎌倉公園遺跡，深作東部遺跡群発掘調査報告
神奈川県立埋蔵文化財センター	栗原中丸遺跡，裏八幡西谷遺跡，神奈川県立埋蔵文化財センター年報2
鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会	蔵屋敷遺跡
鎌倉考古学研究所	千葉地遺跡，蔵屋敷東遺跡，西管預屋敷南やぐら群発掘調査報告書，鑪ケ谷北遺跡
(財)大阪文化財センター	山賀（その3），大阪文化誌 第17号，佐堂（その2），新家（その2），新家（その3），大堀城跡，巨摩・若江北（その2）
(財)東大阪市文化財協会	若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ（遺物編）
高槻市立埋蔵文化財調査センター	摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所年報1983
(社)和歌山県文化財研究会	田殿・尾中遺跡
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡調査研究所―十年の歩み―，草戸千軒町遺跡―発掘調査十年の成果―
(財)鳥取県教育文化財団	久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第2号
文化庁	全国遺跡地図 滋賀県，同岩手県
平賀町教育委員会	木戸口遺跡，新館山遺跡
仙台市教育委員会	南小泉遺跡発掘調査報告書
米沢市教育委員会	戸塚山古墳群詳細分布調査報告書
茅野市教育委員会	山寺遺跡
松本市教育委員会	松本市下神・町神遺跡緊急発掘調査報告書，松本市前田木下遺跡緊急発掘調査報告書，松本市島内遺跡群緊急発掘調査報告書，松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書，推定信濃国府第二次発掘調査報告書
狛江市教育委員会	下小足立北遺跡

金沢市教育委員会	金沢市新保本町チカモリ遺跡―石器編―，金沢市畝田・寺中遺跡，金沢市高尾公園遺跡，金沢市額谷ドウシンダ遺跡，金沢市無量寺，B遺跡・Ⅱ，金沢市南新保三枚田遺跡，金沢市大友・近岡遺跡，昭和58年度金沢市埋蔵文化財調査年報
加賀市教育委員会	敷地平野山古墳群
野々市町教育委員会	野々市町御経塚遺跡
滋賀県教育委員会	野路小野山遺跡発掘調査概報，市遺跡発掘調査概要Ⅰ，延暦寺発掘調査報告書Ⅱ，同Ⅲ，高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要，琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要Ⅱ，県営干拓地等農地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
泉佐野市教育委員会	湊遺跡発掘調査報告書，泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要・Ⅳ
兵庫県教育委員会	龍子向イ山
加古川市教育委員会	加古川市遺跡分布地図，溝之口遺跡発掘調査概要報告書
三田市教育委員会	北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ
倉敷市教育委員会	浅原寺跡
玉湯町教育委員会	史跡出雲玉作跡
熊本県教育委員会	梅ノ木遺跡
宮崎県教育委員会	宮崎県文化財調査報告書 第27集
佐土原町教育委員会	土器田東横穴墓(2)
鹿児島県教育委員会	大隅地区埋蔵文化財分布調査概報，外川江遺跡・横岡古墳，長浜金久遺跡
北見市立北見郷土博物館	広郷８遺跡（Ⅰ）
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第９号
山形県立博物館	山形県立博物館報 昭和58年度
栃木県立博物館	日光参詣の道，第７回企画展 はなひらく縄文文化
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第３集，歴博 第３号
出光美術館	出光美術館館報 第45号
大田区立郷土博物館	特別展 ひな人形の世界
調布市郷土博物館	食の文化展
小松市立博物館	所蔵品目録Ⅰ
静岡市立登呂博物館	登呂遺跡への道
沼津市歴史民俗資料館	考古資料(1)　柳沢・伊良宇禰，沼津市歴史民俗資料館紀要８
愛知県陶磁資料館	特別展 須恵器展
名古屋市見晴台考古資料館	見晴台教室 '83，堅三蔵通遺跡発掘調査概要報告書，笹ケ根古墳群発掘調査報告書，桜本町遺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書，清水寺遺跡第Ⅳ次発掘調査概要報告書，旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書
常滑市民俗資料館	展示品図録 第２集，毘沙クゼ古窯址群，柴山古窯址群，二ノ田古窯址群，清水山古窯址群，松渕古窯址群，高坂古窯址群，三郎谷第１号窯，出地田古窯址群発掘調査報告書，濁池古窯址群発掘調査報告書

豊田市郷土資料館	豊田市郷土資料館収蔵品図録Ⅳ
大阪府立泉北考古資料館	記された世界
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	小建築の世界
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良・平安の中国陶磁
豊岡市立郷土資料館	見手山古墳群発掘調査概要，豊岡市文化財調査概報集
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第11号
福岡市立歴史資料館	福岡市立歴史資料館研究報告 第8集
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	豊後田染荘Ⅱ，宇佐宮弥勒寺
東京大学総合研究資料館	総合研究資料館展示解説
國學院大學考古学研究室	壬遺跡1983，物見処遺跡1983
早稲田大学図書館	古代 第75・76合併号
東海大学史学会	東海史学 第18号
法政大学文学部考古学研究室	本屋敷古墳群発掘調査概報3
法政大学多摩校地調査団	法政大学多摩校地A－1地点発掘調査概報
東洋大学文学部史学科研究室	東洋大学文学部紀要 第37集 史学科篇Ⅸ
国際基督教大学考古学研究センター	はけうえ遺跡・研究編(Ⅰ)
富山大学人文学部考古学研究室	小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ（1982年度），同Ⅴ（1983年度）
大阪大学	待兼山遺跡
帝塚山考古学研究所	帝塚山考古学 No. 3，同 No. 4
朝鮮学会	朝鮮学報 第109輯，同第110輯
(財)古代學協會	古代文化 第302号～第304号
京都府立総合資料館	資料館紀要 第12号，収集資料案内 No. 59，京都府資料目録
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料と永浜宇平
相国寺承天閣美術館	大本山相国寺境内の発掘調査―承天閣地点の埋蔵文化財―
八幡市	八幡市誌 第三巻
福知山市教育委員会	和久寺跡第2次発掘調査概報
綾部市教育委員会	聖塚・菖蒲塚試掘調査概報
宮津市教育委員会	宮津市文化財調査報告 第8集
向日市教育委員会	物集女車塚古墳，向日市埋蔵文化財調査報告書 第9集
岩滝町教育委員会	岩滝町文化財調査報告 第6集
大宮町教育委員会	大内1号墳発掘調査概要
久美浜町教育委員会	権現山古墳発掘調査概報

京都大学埋蔵文化財センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度
佛教大学図書館	鷹陵史学 第9号
花園大学考古学研究室	花園大学構内調査報告Ⅰ
京都学園大学考古研究会	古道 第3巻
瀬戸谷　皓	但馬古墳文化の特質を探る
和田　萃	歴史研究 第278号

<12ページの続き>

「千代川・桑寺遺跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 84-01） 1984. 1. 19
「隼上り遺跡」（京埋セ現地説明会資料 No. 84-02） 1984. 3. 24
「長岡京跡右京第127次」（京埋セ中間報告資料 No. 83-04） 1983. 5. 20
「長岡宮跡第134次」（京埋セ中間報告資料 No. 83-05） 1983. 6. 20
「木津川河床遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-06） 1983. 7. 8
「土師南遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-07） 1983. 7. 13
「田辺城跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-08） 1983. 7. 26
「蒲生遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-09） 1983. 8. 24
「千代川遺跡第3次」（京埋セ中間報告資料 No. 83-10） 1983. 8. 26
「上中遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-11） 1983. 9. 3
「旧洛南中学校構内遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-12） 1983. 9. 22
「長岡京跡右京第141次」（京埋セ中間報告資料 No. 83-13） 1983. 9. 26
「田辺城跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-14） 1983. 9. 27
「千代川遺跡第4次」（京埋セ中間報告資料 No. 83-15） 1983. 10. 4
「長岡宮跡第140次」（京埋セ中間報告資料 No. 83-16） 1983. 11. 11
「千代川・桑寺遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 83-17） 1983. 11. 25
「長岡京跡右京第153次」（京埋セ中間報告資料 No. 84-01） 1984. 1. 25
「重要文化財三宝院宝篋印塔基壇」（京埋セ中間報告資料 No. 84-02） 1984. 2. 27
「ケシケ谷遺跡」（京埋セ中間報告資料 No. 84-03） 1984. 4. 26

—編集後記—

向日市の新庁舎での最初の『情報』，第12号をお届けします。

新庁舎は，長岡宮域北西部の高台の一画に位置し，２階の窓からのながめは，比叡山をはじめとする京都盆地を取り囲む山々などが一望でき，すばらしいものです。周辺は，市役所・警察署・消防署などがある向日市の中心部であり，また，隣には向日市文化資料館および図書館が11月に開館する予定です。（本年は，長岡京遷都1200年にあたり，秋には種々の行事が行われることでしょう。）

さて，本誌では例によって，今年度の当調査研究センターの調査予定と，昨年度の主な調査についてまとめました。また，今年度の「府下遺跡紹介」では，城跡を中心に紹介していく予定です。

（編集担当　田中　彰）

京都府埋蔵文化財情報 第12号

昭和59年６月30日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の３
℡（075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡（075)441-3155（代）